
虹の祓魔師

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の被魔師

【Nコード】

N1746Z

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

エクソシスト
被魔師が題材となっています。ぶつちやけサブキャラの方が強いんじゃない？と思う方もいらっしゃるでしょうがそこはお見逃し下さい。
？主人公は女性のほうですので。あしからず。

プロローグ 始まりの日

周りが燃えている様に赤い。周りには静寂が満ち溢れていた。

「お姉ちゃん、どこ？私を置いて行かないでよ。どこにいるの？お姉ちゃん」

そんな街中の公園で顔を伏せながら、泣いている少女がいた。すると近くの草むらから、女性が出てきた。

「鈴音？どこ？」

「お姉ちゃん？どこ行ってたの？私、心配したんだからね！？」

「あはははっ。心配性な妹ね。ちよっと知り合いに会ってただけよ。あ、そうだ。いい機会だから紹介しておきましょう」

そう言って少女の姉は、草むらの向こうに手を振った。すると、草むらから新しい人が現れた。少年だった。周りの暗さの所為で、顔は見えなかったが。

「紹介するわ。彼は私の知り合いで　君って言うの。鈴音とちよつど同年代だから、仲よくしてあげてね。それで　君。こっちは私の妹で、星川鈴音って言うの。よろしくしてあげてね」

名前の部分がちよつど聞こえなかった。まるで上から封をされているように。

「よ、よろしくお願いします」

少女は姉の足の後ろに隠れながら、挨拶をしていた。

すると、少女の姉と少年は笑い始めた。するとおろおろと少女が慌て始めた。

「こちらこそ、よろしく。今度こちらの小学校に転校するんですけど、その時はよろしくお願いしますね」

「う、うん。わからない事があつたら、何でも訊いてね」

「はい」

どもっている少女とは違い、少年ははっきりと答えていた。そんな二人の違いに少女の姉は爆笑していた。

「ちょ、ちょっとお姉ちゃん！そんなに笑わなくなつていいじゃない！」

「だ、だつて鈴音、どもりすぎ。そんなに緊張しなくなつて、悪い子じゃない、って」

「あゝあ、言っちゃった。言わないように、してたつてのに。俺は知らないよ、もう。それじゃ、俺はこの辺で失礼するよ。じゃあね」

「はいはい、それじゃバイバイ。また明日ね」

「さ、さようなら！」

どもりながらも、少女は手を振って挨拶をした。

「はい、さようなら。星川さん」

少年も振り返り、手を振って離れていった。

そして少女は姉と少し話をしながら、家に帰宅した。そして家族で談笑し、晩御飯を食べて、姉と一緒に風呂に入って寝た。

その日はすぐ眠れなかった。少年の事を思い出して、テンションが上がつてた所為だ。突然、周りが真っ暗になって、その闇から『声』が語りかけてきた。

『我が契約者よ。封印の猶予はもう間もなく終了する。その時に
汝と私の契約により定められた目覚めの時だ!』

そして少女は過去の眠りから解放される。

プロローグ 始まりの日々（後書き）

自分が初めて書いた作品です。最初は学園編ですが、後からは学園編では無くなります。あしからず。

転入生

9月1日、二学期の始業式を迎えた今日私こと星川鈴音は、まだ続く猛暑に苦しみながらも私の机に集まっていた友人たちと喋っていた。

「ねえ、そういえば、鈴音知ってる？今日うちのクラスに転入生が来るんだって」

「なにい、それは本当か？その転入生って女子なのか？男子なのか？教えてくれよ」

そう話しかけて来るのは私の親友の篠月棗である。その声に反応したのは坂田玲二君。

棗ちゃんはいつも元気いっぱいな女の子だ。髪の色は金髪。昔、染めてるの？と訊いたらこれは地毛だと怒られた。容姿はモデル張りの体系をしている。趣味は女の子らしく買い物とか料理なんだけどね。

玲二君は、っていうか玲二君も元気すぎるくらいの男子だ。髪の色は茶髪がかった赤色で、容姿は筋肉があるんだけど？？？？？引き締まったかんじな付き方をしている。まあ、それはどうでもいいんだけど。趣味は外見通り、筋トレとか言っていた気がする。

その会話にある男子が乱入してきた。

「男子みたいだよ。なんでもイタリアから来たらしいよ。日本人みたいだけど」

そう言ったのは進藤光一君。坂田くんの親友である。光一君の髪の色は銀で、特徴というところ、こう同年代とは思えない位に落ち着いている所かな？趣味は読書。

「はあ？海外に居たのに日本人って????？何かおかしくね？」
「それ、私も思った。どういうこと？」

そう言ったのは、玲二君と棗ちゃんだった。私も口には出さなかったけど、不思議に思った。そんな質問もわかっていたのか、余裕そうに光一君は答えた。

「ええつと、なんでもイタリア本部の方に留学してたらいいんだけど、前の学校を何か事情があって通えなくなかったから。こっちに転入してきたんだって」

「はあ。その転入生もいろいろ大変だったんだな」

「でも、うちの高校って周りの高校に比べたら偏差値高いわよね。それにこの高校って結構特異だし、その転入生君はそこるところ大丈夫なのかな？」

「えっとね、大丈夫みたいだよ。何でもその転入生、偏差値70以上みたいだから」

「70以上って????？その転入生、一体何者？」

これも、そう思ったが、やはり口には出さなかった。

「まあ、転入生の話はここまでにして。なあなあ、昨日のあのドラマ見た？」

「食いついてきた割に引くの早いわね」

「えー。別に良いじゃんか。興味無くなっちまったんだから」

「ま、いいけど。それでドラマの話だっけ？見たけど、あれは??????」

もう他愛も無い話に変わっていた。そんな一風変わったと所もこのクラスの特徴だ。

（転入生、か???????。本当にどんな人なんだろ？）

始業式も滞り無く終わり、教室に戻っている時に棗ちゃんが話しかけてきた。

「いやー、もうすぐ転入生の姿を見れるね。ねえ、どんな人なのかな？」

「棗ちゃん、なんでそんな元気なの？」

「んんー？そういう鈴音はなんか眠そうだねえ」

「だって、校長のどうでもいい話もそうだけど、元々この頃なんか寝不足だったんだ。何か変な夢のせいで良く眠れなかったんだ」

「変な夢？そんなもん見たの？まあ眠そうだな、とは思ってたけど私の言った言葉に顔しかめながら、棗ちゃんは聞いてきた。

「そう。なんか、『もう目覚めの時だ』とか、何とか」

「ふーん。ま、そんな変な夢は転入生との出会いで吹き飛ばせ！」

「もう、気楽に言ってくれるな」

でも、話をしたおかげで、ちょっと心がすつとしたのは言わないでおく。言ったらまた調子にのりそうだから。

5分後、担任の先生が教室に入ってきた。ちなみに名前は風間真先生。

「ええー。2学期もまた、元気な皆の顔が見れて先生も嬉しい。さて、普通なら宿題の回収をする所なんだが。先にやらちゃいけないことがある。まあ知ってる者もいると思うが、このクラスに転入生が来ることになった。さて、入ってきなさい」

その言葉と共に、教室のドアが開いた。クラスの皆の視線は、扉に釘づけになった。

扉が開いた先にいたのは、日本人と聞いていたに、髪の色は銀色だった。そして、手にレザーグローブを嵌めていたのと、腕輪をつけていた。それに、顔の方もモデルと同じぐらいで、身長の方は百七十センチぐらいあった。

クラスの皆が啞然としている中で、転入生は自己紹介を始めた。

「初めまして。今日このクラスに転入してきました、炎藤三剣です。これから色々よろしくお願いします」

転入生（後書き）

同日投稿。b y ドラえもん。それではまた後ほど。

転入生との会話

当然だけど、転入生のあまりに日本人らしからぬ姿を見て、咂然としていたクラスメイトは答えられず、固まっていたのを見かねて先生が助け舟を出してくれた。

「炎藤への質問などは、休み時間などにしてくれ。あと、炎藤。君の席は星川の隣だから。ほら、あそこだ。星川、しばらく彼に教科書とかを見せてやってくれ。転入生の紹介も終わった事だし、宿題集めるぞー。早く用意しろ」

そこでクラスの皆も意識を取り戻した。「ええー面倒くせー」とか文句を言ってる人もいたけど、私はそれどころでは無かった。

転入生が自分の席の隣に来るというんだから。まったくシャレにならない。いや、シャレじゃないんだけども。

私は知り合いぐらいにもなれば大丈夫なんだけど、全然知らない人に話しかけるのは大の苦手だからだ。

そんな事を考えていると、隣の席に座った転入生の炎藤くんが話しかけてきた。

「ごめんね。これから色々お世話になると思うけど、よろしく願いますね。ええーと、星川さん？」

「えっ、ああ、うん、よろしく。????????ってなんで私の名前を知ってるの？」

そんな私のまぬけな質問に、炎藤くんは苦笑しながら答えた。

「さっき、風間先生が仰ってたじゃないですか。星川の隣な、って」
「えっ？あ、そっか。そういえば、そうだったね」

そんな事も忘れていた私は、なんとか笑ってごまかした。そんな下手な会話していた時に、ちょうどチャイムが鳴った。

「うわ、チャイム鳴っちゃったか。まあ、いいか。次の時間にホームルームするから、誰も帰るなよ」

その言葉にクラスの皆は「ええー」と言っていたが、風間先生はそこらへんの対策も抜かりがなく、即座に炎藤くんを盾に使っていた。

「炎藤に聞きたいこととか色々あるだろ？この休憩時間に色々聞いとけ。そんじゃ、次の時間までちゃんと待ってけよ」

当然、炎藤くんが聞き逃すはずもなく

「ちょ、ちょっと、風間先生！俺を身代わりに使わないでくださいよ！」

そんな彼の苦情を先生は軽くスルーして、教室を出ていった。私はスルーされた事に落ち込んでいた炎藤君に、慰めの言葉をかけていた。

「まあまあ、風間先生はいつもあんな感じだから、気にしないでね？」

「あ、ああ。うん、大丈夫。気にしてくれてありがとう」

そんな事を笑顔で言うので、つい私は照れてしまった。

（でも、私的には先生に苦情を言ってた時みたいな、喋りの方が

私は嬉しいな????????)

そんな事を考えていると、急に黙った私を心配してくれたのか、炎藤君が喋りかけてくれた。

「ええっと、星川さん？大丈夫ですか？」

「え、うん。大丈夫。心配しないで」

あまりにも早いスピードで言ったものだから、炎藤君はびっくりしていた。

「はあ、そうですか????????」

そんな事を喋っていると、チャイムが鳴った。そこで、風間先生が戻ってきた。

「そんじゃ、ホームルーム再開するぞ。全員、席に着けー」

ファミレスにて

その二十分後、やっとホームルームが終わった。風間先生が教室から出ていくと、みんなちりじりに動き出したのを確認すると、玲二君、光一君、棗ちゃんが私の席ごと炎藤君に喋りかけていた。

「えっと、炎藤だっけ？俺はクラスメイトの坂田玲二だ。これからよろしく！」

「私は篠月棗。まあ、同じくクラスだから喋る機会も色々あるだろうけど、よろしくね。」

あ、隣の子は自己紹介してないみたいだから、一応言っておくけど。隣の子は星川鈴音って名前だから」

「遅ればせながら。僕の名前は進藤光一。これからよろしく」

そんな風に皆が自然に自己紹介をするので、炎藤君も呆然としていた。っていうか、棗ちゃん。さらっと私の自己紹介しないでよ。後でする気だったのに。

「んー？だって鈴音に任せてたら、すごい時間がかかるんだもん。それに、こっちの方が早いじゃん。違う？」

それはそうなんだけど？？？？普通、自分で言いたいと思うのが普通なんじゃないかな？

っていうか、いつものことながら、何で私の考えている事がわかるんだろう。超能力？

「ふふん、鈴音の事なら大抵はお見通しよ」

「女子共の話しはその辺にしろ。この後、暇か？暇だったらさ近くのファミレスで、お前さんの歓迎会をやりたいんだけどさ。」

って言っても、メンバーこれだけだけど」

さすがに私もこの発言にはびっくりした。

「え、何それ！あたし聞いてない！」

そうあたしが言うと、坂田君はこう言って返してきた。

「ふつ、当たり前だろ。ホームルームの時間にアイコンタクトで決まったからな。」

っていうかわかってたら、逆にこっちがびっくりだね。おまえは超能力者か？」

そんな話を話していると炎藤君が話に介入してきた。

「ええつと、坂田君に篠月さんと進藤君？別にこの後は暇だから別に構いませんけど、この学校は被^{エクソシスト}魔士を育成するために作られて、そしてその能力を悪用しないように全寮制にしてて、門限もあるって聞いてますけど？」

そう。この学校の名前は国立被^{エクソシスト}魔士育成高等学校という。目的はその名の通り。

この学校は確かに全寮制だが、守っていない生徒の方が圧倒的に多いのだ。

それじゃあなんでそんな高校ができたのかは？？？？？また後で説明しよう。

そんなことを考えていると、坂田君が説明していた。

「まあ確かにそうなんだけどな、でもほとんどの生徒は、守ってないぞ。まあ、学生なんてまだまだ子供だからな。色々やりたい事が

あるんだよ、きつと」

それを聞いて炎藤君は啞然としていたが、ほんの一瞬で平常を取り戻していた。ちよつと考えた後、私達に行く、と返事をした。

その後に校門を出て、近くのファミレス『アスリカル』に到着した。そこでとりあえずドリンクバーを注文して、ひとまず席に着いた。話をしていく内に空気が和んだら、坂田君が炎藤君に質問した。

「そういえば、訊きたい事があるんだけど、いいか？」

「え、何？とりあえず、何でも訊いくれていいよ。答えられないのは、無理って言つから」

「わかった。じゃ質問なんだけど、お前って日本人なんだよな？」

「うん。そうだけど、それがどうかした？」

「じゃあさ、髪が何で銀髪なんだ？見たときから気になってたんだけど」

皆、同じことを考えていた。どう見ても、染めてるようには見えないし?????。

自分の髪を弄びながら、炎藤君は説明してくれた。

「あ、これ？俺はさ、父さんが日本人で、母さんはイタリア人なんだ。つまり、俺はハーフってこと。それで、眼と肌は父さんから、髪は母さんのが遺伝したってこと」

「へえ、そうなんだ。つうか、ハーフって初めて見たよ」

その後、イタリアの話を読ませて貰った。ゆるい雑談を始めて二十分後に突然、炎藤君と進藤君が立ち上がった。

不思議に思つた坂田君が二人ともに聞いた。

「ど、どうした？突然立ち上がった。まだ門限まで時間あるけど？?????」

そこまでしか聞こえなかった。なぜなら?????爆発音で
遮られたからだ。

ドカアアアアアン！と、外から音が鳴り響いた。

悪魔との戦い(1)

それに遅れて悲鳴が外の音を満たした。その中に悪魔だ！悪魔が現れたぞ！と、叫んでいる人がいた。そんな声を聞いて固まっている私達に、炎藤君は怒声をぶつけてきた。

「何、固まってるんだ！動け！動いて一人でも多くの市民を救え！これは俺達、退魔士に課せられた義務だ！わかったらとっと動け！」
「待てよ！そういうお前はどこに行く気なんだよ！一人だけ逃げる気か！」

「俺は???????元凶を断つ」

「はあ？お前???????自分の言っている事が、どんだけやばいか、分かってんのか！もしもその悪魔が集団で来てるんなら、トップは中級、上級悪魔だぞ！俺らに対応できるレベルじゃない！個人で来てるなら下級レベルだけど。それだって一人じゃ倒しきれないと、教えられているじゃないか！」

「じゃあお前は倒しきれないからって諦めるのか？違っただろ！エクスリストならどうやっても死んでしまうような場面なら、より多くの一般人、或いは仲間を救ってから死ね！」

何もしないで死ぬなんて、そんなのはただの犬死だ！」

炎藤君はなおも何か言おうとしたが、時間の無駄と判断したのかすぐに店を出た。

ただ一言を言っただけで店を出て行った。

「ごめん。まだ見習いみたいなもののなのに、言いすぎた。逃げるならせめて、先生達に連絡を入れてくれ。それじゃあまた後で」

私達は約一分後に、玲二君の言葉で市民を助けるために動き出し

た。

その言葉はこうだった。

『おい、こんなで良いのかよ。あいつに?????炎藤にだけ任せておいて。気に入らねえ。俺達でやろうぜ。あいつを皆で見返してやろうぜ!』

幸いにも、市民のほとんどはもう逃げ終わっていた。

だけど、反比例するぐらいに、悪魔がそこらじゅうにいた。そして、炎藤君を探し始めて5分後に、やっと炎藤君を見つけた。しかもその時、悪魔との戦闘中だった。戦闘は炎藤君の方が有利だった。そう判断したのは、5体ほどいた悪魔がずたぼろで満身創痍という感じだったのに対して、炎藤君は刀を持って無傷で構えていたからだ。そして手の中の刀は、聖なる波道を放っていた。私達を横目で見て、私達に叫んでいた。

「何で来た!言ったる!先生達に連絡しろって!」

そんな事を叫んだ炎藤君にむかって、こちらも叫び返した。

「何よ!私達があなたの事を放っておける、とでも思ってるの!? 私達は?????一緒に闘う仲間じゃない!」

一瞬、言葉に詰まったが私は一体何を言おうとしていたのだろうか?だがそんな事を考えるのは、後回しだ。見つめているとため息をついて、私達に言った。

「わかった!じゃあ、術式でのサポートを頼む!」

「了解!じゃあ、皆いくよ!」

「了解!」「」

「我、放ちたるは全てを凍てつかせる氷の弾丸！『エクトブラスト！』」

「来たれ！汝らはあらゆる物を貫く雷撃の槍なり！汝が刃を持って我が敵を貫かん！

『レイズエツジ！』」

「大気に眠りし精霊達よ。汝らが光を持って、我に仇名す敵を討て！」

「夜の闇に潜み、闇夜に名を連ねし精霊達よ。その闇を持って我に仇名す敵を討て！」

玲二君と棗ちゃんが放ったのは天術で、私と光一君が放ったのは精霊術である。

何が違うのかと言われると説明が難しいんだけど、ぶっちゃけると天術は己の中にある天力を用いて放つ技。精霊術は異界にいる精霊の力を借りて放つ術なんだ。

天術は、自分の血の中にある天力を天術陣　通称、天陣とされる物に、注ぎ込んで放つ術。精霊術には術式がいない代わりに、威力が低いんだ。

えっ？何でそんな物があるのかって？しょうがない、説明しよう。天力は8年前の戦争の時に神様から与えられた力なんだ。

その戦争が何だったのかは、後々語る事になるだろう。

今は闘いに集中しようじゃない。私達が放った術はそれぞれ悪魔に命中した。

元々傷ついていたせい、悪魔達は攻撃が当たった瞬間、塵になっちりて消えた。

最後に残された悪魔は、炎藤君の刀に切られて、同じように塵になっちりて消えた。

炎藤君は刀を持って警戒を維持したまま、私達に話しかけてきた。

「君達?????何でまだここに残ってんの？俺は戻れって言っ

たよね、確か」

その質問に答えたのは私だった。

「いや私達にも出来る事があるんじゃないかな、と思ってね」
「俺の心臓に悪いからやめてくれ」

本当に顔を真っ青にしていたので、謝罪しておいた。
そんなやり取りをしていると、凄まじい魔力の波動が流れてきた。
その瞬間、私達の前方二十メートルぐらいの場所に突然、悪魔が現れた。

「???????さつきから、配下達がやられていると思ったら、あな達達の仕業ですか?」

「そうだ、と答えたら?????どうする?」

「決まっています。死んでいただきます」

「だってよ。?????なあ、お前が、この場所が気にいつてると思うならさ。そろそろ本気で戦うべきじゃないか?いいとこ見せつけてやるうぜ」

そんな言葉を言っている、炎藤君に返事したのは、驚く事に進藤君だった。

「そう?????ですね。《光》としての役割を、果たさないといいませんよね」

「《光》?まさか貴様が『光龍王』だというのか!?」

「そんな風に呼ばれるのも、いつ振りでしょうねえ!」

「さあな、俺らをそんな風に呼ぶのは悪魔達だけだからな。

いつもはこんな風に名乗らないんだけどな。今回は名乗らせてもらおう。

『彩炎の龍騎士』・炎藤三剣、推して参る」

「それじゃ俺も名乗ろうかな。?????『閃光の龍騎士』・進

藤光一、参ります」

悪魔との戦い（１）（後書き）

この作品のエクソシストは術式系と武術系の二つが存在します。
主人公たちは両方とも使えますが。ちょっとしたチートみたいなものです。

それでは今日はこれまでで。

悪魔との戦い(2)

そんな私達を、置いてけぼりにしてスケールの大きすぎる会話が
行われていた。悪魔の方を見ると、歯軋りしながら叫んでいた。
「馬鹿な！こんな極東の地に『セイザチンザイツ聖龍騎士団』の団長が二人もいるだ
と！？そんな馬鹿な事が、あつてたまるものか！」

聖龍騎士団 それは、イタリアのローマ法王庁にある騎士団
である。その騎士団には合計で七つの部隊がある。

ファイアンマ 《炎》、アックア 《水》、ギアッチョ 《氷》、トゥオーノ 《雷》、ヴェント 《風》、ルーチェ 《光》、ブレイオ 《闇》この七
つだ。

どの騎士団にも異能力者がいるらしい。そのため、競争率も凄いと
訊いた事がある。

なんで騎士団の名前が属性の名前なのか。それはこの七つの騎士
団の各師団長が、その属性の龍王と契約しているからだ。それは裏
を返せば龍王達と契約さえすれば、師団長になれるっていうこと。
だけど、龍王達にも好き嫌いぐらいはある。

だから龍王達と契約するためには、龍王達が出す試練をクリアし
なくちゃいけない。つまり、今の師団長はそれぞれがトップ級のエ
リートなのだ。そんな強い人達のしかも、七人しかいない内の二人
もいれば、それは確かに驚愕だろう。

っていつか、2人がそんなエリートだった事の方が、私達にとっ
ては驚きだった。

だが二人はそんな驚きも見越していたのか、はたまた慣れきって

いるのかは分からないけど冷静に対処していた。

「残念だけど、これは事実。ま、自分の運のなさを呪うんだな。いくぞ《光》」

光一君は、炎藤君の言葉に頷いて、手を合わせながら祝詞を唱えていた

「わかりました。我が内の中に眠りし剣よ、今汝が姿を現せ。汝はかの英雄ランスロットが振るいし剣、汝が銘はアロンドイト！」

掌から出現した剣は西洋剣だった。アロンドイト????????確か円卓の騎士団の一人、ランスロットが使っていた剣の名前だ。

「へえ。それ使うんだ。珍しいな。てつきり、オートクレールでも使うのかと」

「まあ、相手は上級悪魔っぽいですしね。尊厳を持って戦った方が良いでしょう？」

「俺は文句は言わん。ただ珍しいな、と思ったただけだ。じゃ、やるか。俺は天術を使ってサポートにまわる。お前は剣で討て。いいな？」

「ええ、わかりました。あ、そうだ。玲二、ちょっと！」

戦い始める寸前に、光一君は玲二君を呼んだ。

「な、何だ？」

「彼女達の事、頼んだよ。あと、戦闘が始まったら、この札を使って結界を張って隠れといて。わかった？」

そう言つて光一君は玲二君に4枚の札を渡していた。

「ああ、わかった????????死ぬなよ？」

「当たり前。っていうか、誰に向かって言ってるの。じゃあ、行ってくるよ、親友」

「おう。頑張れよ」

そう言っで空中で拳をぶつけあった。その時、炎藤君が光一君に喋りかけてきた。

「もういいか？そろそろ行くぜ」

「ええ、大丈夫ですよ。じゃあ、皆」

「「いってきます」」

炎藤君が進藤君と、同時に行ってきた。こう言われたら、言い返すことは決まっている。棗ちゃんと坂田君も、考えていた事は、一緒だったようなので一緒に言った。

「「いつてらっしゃい！」」「行つて来い！」

その言葉と共に、二人は駆け出した。

悪魔との戦い（3）

「人間風情が！たえセイリョウキサイツ聖龍騎士団の団長といえど、簡単に私を倒せるとでも思っているのか！？なめるなよ！」

悪魔はそんな事を言いながら、魔術を使って攻撃してきた。

「あんなこそ、分かってない。セイリョウキサイツ聖龍騎士団の団長って言うのはな？
?????」

「一人ひとりが、魔王すらも倒せる実力を持つてるんだ（ですよ）
！」

だけど二人には魔術の余波すらもかすりしなかった。

そして、さらに悪魔との距離を詰めた。そこで炎藤君は天陣を構築し始めていた。悪魔は十メートルに差し掛かったところで、剣を出現させて近接戦闘になった。悪魔と光一君は激突し、戦闘が始まった。その戦闘は苛烈を極めた戦いになった。

だけど、悪魔はすぐに競り負けた。進藤君の剣が速すぎたのだ。光一君の剣術は、神速といっても差支えないほどの速度だった。なにせ、剣の残像が攻撃のたびに、増えていくぐらいなのだから。

私と棗ちゃんには残光ぐらいしか見えなかったが、玲二君には見えているらしい。光一君の連続攻撃を受けて、悪魔は膝をついた。

悪魔が膝をついたので、戦闘は終わったんだと思って、結界を解いたのがミスだった。

その瞬間、悪魔は力を振り絞って、私達に魔術を撃ってきた。異変に気付いた炎藤君が、助けに入ってくれた。天力で障壁を張って魔術を受け止めていた。

だけど、その魔術は相当の威力があった。炎藤君でも、そう簡単に消すことはできなかった。炎藤君は数秒間、眼を閉じた。そして

次に眼を開くと、炎藤君の眼に六芒星が浮かんでいた。そして眼から術式が出てきた。

「その魔術に介入、及び干渉。その後、魔術の破壊」

そう炎藤君が呟いた直後、術式から光が絡みつき魔術は消え去った。そして炎藤君は、構築していた天術陣の天術の文言を唱え始めた。

「其はあらゆる物を飲み込む、無限の焰なり。」

其が焰を持って、汝が炎を浴びし者を浄化せよ。

我が力の元、我が敵を討つ深淵の龍となり敵を飲み込め。

『ベイルズ炎獄の（・）ベルイアンマ絶焰』

炎藤君の出した炎は、龍の姿になって悪魔を飲み込んだ。悪魔は防御壁を張って防いでいたが、それも時間の問題だった。三段文言の天術なんて初めて見た。?????あんなすごい威力なんだ。私達学生が使えるランクは一段。有能な人でも二段。三段ともなると、頭が良い人が寝る間も惜しんで研究しないと使用できないレベルなんだ、と教えられた。

今の導師様は全員使えるらしいけど。三段文言を使える人は本当の天術使いなんだ、と風間先生は言っていた。おっと、それよりもちゃんと戦いを見ないと。悪魔は炎藤君の眼を見て、愕然とした顔を見せた。その後、炎に包まれながらもフツと納得したような顔をしながら、言った。

「君達はいつか後悔するだろう。これだけは言っておこう。さて名残惜しいが、ここまでのようだな。せめて名乗ってから去るとしましょうか。」

紳士淑女の皆さま、私は最上級悪魔であり、インド系の魔王アスラ

に名を連ねる者。名はアガースラと申します。それでは、御機嫌よう」

そう言い残し、アガースラは塵になって消え、悪魔達も去って行った。その後、炎藤君と進藤君は「明日会ったら、全部話すから」と言って去っていったので、私達は何もできなかった。

学園から先生たちが来て、私達に「後は先生たちがやっておくから、もう帰りなさい」と言ったので、私達は先生の言った通り、寮に帰ってシャワーを浴びながら、今日の事を考えていた。転入生の登場。悪魔の襲来。

?????そして、その転入生と友達が実は聖龍騎士団の師団長だった。

だけど、考えてみても何も分からなかった。それが当り前なんだろうな。そう納得して、考えるのをやめてすぐに寝た。その日に見た夢は、悲しかったような気がする。

悪魔との戦い(3)(後書き)

試験終了直後の第一発です。それでは。

EX その日の夜

その夜の校舎の屋上では、こんなやり取りが行われていた。屋上に二つ、人影があつた。何か二人で話し合っていた。

「あゝあ、まさかこんな早くばれるとは思わなかったな、拓也？」

今は誰もいないので、本名で呼び合ってる。俺の本名は金城炎真。あいつの本名は篠宮拓也。基本的に人のいる所では偽名で呼び合うが、人のいない所では本名で呼び合う事になってる。

この学校の唯一の同僚????いや、まだあいつがいるか。
どうでもいいけど。とにかく、同僚に声をかけた。

「まあ、仕方ないんじゃないですか？まさか、悪魔達にばれて
いる、とは思いませんでしたか？？」

こいつ、もしかして知らないのか？そう思ったので、言ってみよう。

「何だお前 まさかあの場所がばれていない、とも思ってたのか？ あそこはな、人間界はもちろん、天界・魔界にとつても、第一級指定地域なんだぞ？ ばれてて当たり前だ」

まさか、そこまで分かってないとは思わなかったな。説明しなさ過ぎですよ、統帥。

案の定、拓也は驚いた声を上げていた

「えええええええええええつ！」

俺は耳をふさぎながら言った。うるさいな、こいつ。迷惑だろ。

「あ、すいません。ちょっと驚いたから」

「お前それでちよつとなのか？」

拓也は間のわるそうな顔をしている。

「あ、あはは。ごめん、ごめん。まあ全ては明日からの行動次第だね」

「そうだな。全ては明日から、だな」

まあ、これからいろいろ忙しくなりそうなんだけどな。そんな会話に介入してくる声があった。拓也の契約獣 いや、契約龍である光龍王・ゼノリウスだ。

『貴様ら、そんなに楽観視していてよいのか？』

「ま、いいんじゃない？そんなに急かしたって変わることもなんかないよ」

『しかし????一刻一刻と時間が迫っているのだろうか？』

さらに会話に乱入してくる声があった。俺の契約龍である炎龍皇・レギエルだ。

お前ら、暇なのか？一瞬そんな事を考えてしまった。

『まあまあ、その辺にしようぜ。これからの戦いに備えて休もうぜ。相棒』

『レギエル！炎龍皇ともあろう者がそんな態度で良いと思っているのか？』

事態は貴様が思っているよりも、もっと深刻な事なのだぞ！』

見ての通り????いや、訊いての通りかな？光龍王は少々、神経質な性格をしている。ゆえに、説教をそれも人前であろうと余裕でするのだ。

『大体、貴様は昔からいつも?????』

これは長くなりそうだったので、さすがに止めた。

「止めとけ、ゼノリウス。今更どうこう言ったって、何も変わる事はない。それよりも今、俺達がやるべき事は他の奴らが来るまで、こここの封印を持たせること、だろ？」

『確かにそれはそうだが?????』

この意見には、さすがの光龍王も文句も言わなかった。そこで拓也が、上手く補佐してくれた。

「じゃあ、この辺でお開きにしましょうか。明日や今後の事も俺らは、やるべき事をするだけなんですから」

『そうそう、そんなに急かしたっていい事ないって』

そのやるべき事は大量にあるだろうけどな。

苦労症のゼノリウスは大変だな。さて、そろそろ終わりとするか。

「今日の集会は終わり。各自、今後に備えよ、ってことで終わり。我らが剣は弱き者のために、我らが命は大切な者達のために」

騎士団お決まりの言葉を口にして、集会は終わった。そう、俺の力は大切な人達のために使う。大切な人を守るようになるために、俺は強くなったんだ。もう?????あんな思いはしたくないから。とつと寮に戻るとするか。これから色々楽しくなりそうだ

な。

『どうした、相棒？何か楽しそうだな』

「そうか？ま、この学園は色々と面白そうだからな。仕方ないだろう？」

『ふーん。まあ別に構わんけどな。じゃ、お休み』

何だこいつ、珍しく淡泊だな。まあ、いいや。色々考えているうちに、寮に到着した。そしてすぐに布団に入って寝た。その日は久しぶりに昔の夢を見た。

説明の談話（１）

いつもより早く起きてしまった私は、いつもより早めに教室に行った。どうという程の理由はないが、ただ部屋に居たくはなかったのだ。

教室に着くと玲二君、棗ちゃんがいた。私が来た事に気づいて口々に挨拶をしてきた。

私も適当に挨拶をしかえした。すぐ後に、炎藤君と光一君が教室に入ってきた。

彼らの姿を見た途端、私を含めて皆、固まってしまった。

そんな私達を見て、炎藤君と光一君は、それぞれ苦笑いをしていた。

次に瞬間には、炎藤君は真面目な顔で私たちに話しかけてきた。

「皆、昨日は説明もせずに戻ってちまって、悪かったな。これから説明するよ、俺の?????いや、俺達の事を」

「別に無理に話す必要はないんだぜ？お前らの事を無理に聞くに気はないし?????」

そこまでしか玲二君は言えなかった。何故なら、炎藤君が口を挟んだからだ。

「いや、やっぱり君たちには知ってもらいたいから。まあ、君たちが何を言っても話すけどね、俺は」

「ったく、横暴なやつだ。ま、別に嫌いじゃないけどな。そういうの」

「「私も」」

その返答を聞いた炎藤君はきょとんとしていたが、そこから一点の曇りのない笑顔を見せてくれた。光一君は何も変わらず微笑んでいた。半年とはいえ、ずっと一緒に行動していたからだと思う。

「ありがとう。じゃあ、話すよ。俺達の事を」

その後、炎藤君が話した内容は?????はつきりいって、驚愕の内容だった。

説明の談話(2)

「無いと思うけど、一応約束してくれ。これから話す内容は誰にも話さずに自分の胸の内にしまっといてくれ。いいな？俺達の任務はある重要地域の警護。正直俺は学ぶこと、ってないんだ。本部直属の学校を首席で卒業したから」

「「「えええええーっ！」「」」

「まあまあ、とりあえず落ち着いてくれ。話に戻るけど、俺達は被魔士の総本山、イタリアのローマ法王庁に居たんだ。俺の階級は昨日あの悪魔？？？？？アガースラが言っていた通り。聖龍騎士団の第一師団長を務めてるんだ」

「ちなみに、俺は聖龍騎士団の第五師団長ね」

「そこで俺達はまあ、当然なんだけど。色んな悪魔、もしくは悪魔と契約した人？？？？？つまり、《契約者》とかと戦ってたんだ。8年前のあの戦争？？？？？そう、魔王率いる悪魔達が人間界に攻めてきたあの戦争。今も続いてるけど。俺はその当初から戦ってるんだ」

《契約者》
アクヌス

それは、悪魔の所有する魔獣と契約をかわした人達の事を言う。

契約をかわした人間は、どんどん魔獣にその精神を蝕まれる。一週間経つ頃には、完全に精神を食われ、その魔獣が持つ破壊衝動のせいで暴れだす。そして目につく物や人、全てを破壊しようとする。そうなってしまったら最後、殺さなくてはならない。そういう人たちの事を言う。稀にその魔獣すらも飼い馴らす人がいるらしい。だけどそれだけじゃない。

聖獣と契約をかわして《契約者》になる人もいる。そういう人を

《天約者》、魔獣の方は《冥約者》と言っらしい。ちなみに聖龍騎士団の団長達も《契約者》だ。

それよりも8年前の戦争だ。あの戦争のせいで私は?????!!顔を下に向けていた私を見て、棗ちゃんが心配して話しかけてくれた。

「鈴音?大丈夫?」

「う、うん。大丈夫だよ、棗ちゃん」

そんな私の気持ちを知ってか知らずか、炎藤君は話題を変えてくれた。

「おっと、ちょっと話がそれたな。それじゃ、あの時、俺が見せたこの眼の話をするんだけど、いいかな?」

私も含めて皆、一斉に頷いた。

「んじゃ、話すけど、この眼は天眼って言っんだ。天眼って言っのは、まあ一言でいえば特殊な力を持った眼の事だ。

俺の天眼の名前は『天魔の(・)眼』^{アルミエス}_{サイト}。この眼の能力は、人間が使う天術・精霊術。悪魔達が使う魔法・魔術の術式。そういった^{たぐい}類の術式を読み取り、操ることが出来る力なんだ。

この眼のおかげで俺は今まで生き残ってこれたんだ。まあ、この眼のせいでいじめられたりしたことも、あっただけだな。

え?その眼はいつから使えたかって?物ごころついた時から、そういう力があるのはわかってた。初めて使ったのは?????五歳のころかな?

その時に俺もこの眼の事を、母さんに教えて貰ったんだ。何でも俺のご先祖様が持っていた力は、遺伝で受け継がれていくらしい。まあ、他にも天眼保持者はいっぱい居るんだけどな。種類は????

???さすがに多いから全部は把握してないけど。

一応言っておくけど、世界には他にも魔眼保持者、或いは神眼保持者が存在するんだからな。俺は恵まれてる方なんだから感謝してるんだ。これでもな。

そんな悲しそう顔すんなって。俺ら保持者達は別に、そんなに困ってるわけじゃないんだ。

そういや昨日、遺伝の話をしたけどな。あれ、嘘だから。この髪の毛は染めてるだけ。俺が母さんから遺伝したのは、眼の力と才能だけなんだ。悪いな、嘘ついちまって」

そこに唐突に話に割り込む声が出た。その人は気配もなく話に入ってきた。

「まあそんな生活を十年以上も送ってるんだから慣れもしますよね、師匠」

「まあその通りなんだがな。っていうか、人が話してる時に割り込んでくんないな。」

前から言ってるんだろ？はあ、弟子なんかにするんじゃないかった」

炎藤君がため息をついていた。だがこちらとしては、全く分らない。

どこから声がしてるんだろう？そんな思いが湧いてきた。

「いやいや、ちょっと待て。さっきから声がするが、どっから聞こえてんだ？」

「えっ？君たちの後ろだけど。ほら、そこ」

「「「え????????うわああああ!」「」」

説明の談話(3)

「そんなに驚かなくてもいいじゃんかよー」

そう言ったのは、学年の剣術学科でトップクラスの成績を持つ、かりのかける狩野駆君だ。

狩野君の髪の色は金髪で、容姿はモデルが顔負けしてしまうレベル。ファンクラブも出来上がっている程、人気があるんだ。

何故、彼がここに？

「お前が限界まで気配を断ってるからだろ？人に喋りかける時はその状態やめろ」

「師匠がやつとけって言いたくせに?????あだっ！」

狩野君がぶつぶつと文句を言っていると、炎藤君に頭を殴られていた。うわ、痛そう。

「何ぶつぶつ言ってた。うるさいぞ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。なんで狩野の事を、お前が知ってたよ!？」

「ああー、そっか、言ってなかったっけ。こいつ、俺の弟子なんだ。まあ階級と流派は秘密だけだな」

「ハア?」

「ちょっと待て。え、じゃあ何か。そいつは?????狩野はお前の弟子で、もう現場で戦ってるエクソシストだって言うのか？」

「うん」

「なんじゃそりや??????」

「ええっと、なんか落ち込んでるとこ悪いけど、話を続けても良いか?」

「いいよ、もう。何でもどんと来い。って感じだよ、もう」

「ありがとう。つつても、もう話す事一つしかないんだよね」

「あの事ですか? 師匠」

「そつ、その事だよ」

「えつ、どの事?」

私の疑問の声はあつさり無視された????? ちょっと悲しい。

「あのさ、皆に頼みがあるんだ。多分二学期中に小隊を組むことになると思うんだ。」

その時に俺とこいつと君たちで小隊を組みたいんだ。どう? このお願い聞いてくれる?」

そこは玲二君が即座に返答した。答えは即答だった。

「いいぜ。事情を知ってるもん同士の方が、気も楽だからな。お前らも良いだろ?」

「もちろん、賛成」

その答えの出すあまりの速さに、炎藤君も狩野君も驚いていた。さすがに、長い付き合いをしている光一君は、驚かなかったが。

「え、ちょっと皆そんな簡単に答えだしちゃっていいの? そりゃ頼んだのは俺たちだけだよ。もっと考えても良いんだぜ?」

「いいってこういう話は早めに答え出した方が気が楽だし。気にすんなって、俺らはこれで良いって言うてんだからさ。それよりも、

これからよろしな」

「ああ、よろしく」

遠藤君は微笑みながら握手した。そのすぐ後に、他の生徒が来たのでちよつとよかった。

第十三番小隊VS炎藤（1）

朝のHRの時間に緊急全校集会が行われた。

内容は当然というか、皆知っていたけど昨日の悪魔襲来事件の発表だった。教室に戻った後、風間先生から今日から一週間以内に小隊を作るように言われた。

昨日の事件のせいで今日の授業は無くなり、小隊を組む事になった。もう決めてあった私達はすぐに申請して、第二十七番小隊のバツジを貰った。

ちなみに隊長は私。話し合いでそう決まった。隊長は誰がやるのかと話し合いになった時、光一君と炎藤君は私を指名してきた。当たり前だけど、私は理由を訊いた。二人が言うには

『俺と光一はやるわけにはいかない。俺らはここにいとばれるたらまずいからな。で、残るは四人になった訳だけど、狩野はだめ。こいつにはそういうの全然教えてないし、素質がないから。』

三人の中から選ぶとしたら、俺は君を選びたいんだ。何故なら、多分君には統率力がある。もし光一の報告通りなら、大抵の事は出来るよ。というわけで俺の理由は以上。お前はなんかあるか、光一？
『同意見ですよ。補足するなら、星川さんってそういうタイプの氣質なんですよ。だから大丈夫だって』

そう言われては文句のしようもないのでしぶしぶ承諾した。

申請を済ませた後、技術の向上と、私達の技術チェックをかねて特別演習場で戦闘技術の練習をしようと、炎藤君が言ったので、皆で特別演習場に行った。そこには数名の先輩たちが戦闘訓練をしていた。

私達に気がついたのか、その先輩の一人が私達に話しかけてきた。一応、私が対応した。

「何だお前ら。新しくできた小隊なのか？そうじゃないなら、とつとと帰れよ。流れ弾に当たって怪我したくなかったらな」

「はい、新設したばかりの部隊です。先輩たちは何番小隊の方々ですか？」

「俺達は第十三番小隊。お前らもここに戦闘訓練しにきたのか？」

「はい。先輩たちもそうなんでしょう？」

「ああ。昨日の戦闘では、活躍できなかったからな。もし、今度昨日みたいな戦闘が起これば活躍したいからな。そうだ。お前ら、俺らとちよつと模擬戦やろうぜ」

先輩がそう言った瞬間に玲二君と炎藤君が会話に参加した。

「えつ、ちよつと先輩、何言ってるんですか。俺らみたいな出来たばっかの弱い小隊相手にしても意味ないでしょ？」

「坂田君、この人たちの相手は俺がしとくからさ。先に準備運動をしといてよ」

「ほう、言ってくれるじゃないか二年風情が。いいぜ、要望通りほこぼこにしてやるよ。ちよつとこつち来いよ」

「ええ、結構ですよ。じゃ行ってくるよ」

第十三番小队VS炎藤（2）

「じゃあルールを決めるぜ。1対5のバトル、武器は素手のみ。ただし天術は使っても良い。まあこんなもんか。そっちもこのルールで良いか？」

「ええ。じゃ始めましょうか」

「ああ、そうだな????????いくぜ！我、放ちたるは雷の矢！『ジールエクス！』」

「雷の矢できますか????????なら！全てを燃し尽す炎の弾丸よ！今、汝が力を持ってあらゆる物を灰塵とかさん！『バーンマグナス！』」

炎藤君が描いた天術陣から炎の弾が射出された。先輩が放った雷の矢と、炎藤君の炎の弾丸が激突した。

破られるかと思ったら、一瞬で炎藤君の弾丸が雷の矢を相殺し爆発した。

「ほう、なかなかやるじゃないか。」

「先輩こそ。一段文言のしかも初級天術なのに、なかなかの威力があるじゃないですか」

「ふっ、お褒めいただきどうも。だがお前忘れてるのか？これは個人戦じゃなくて集団戦なんだぜ？」

先輩がそう言った瞬間、煙の中からあと4人の先輩が出てきた。その先輩たちを見ても驚かずに、炎藤君は対応していた。

「もちろん忘れてません、よつと！」

炎藤君は最初に向かってきた、先輩の顎先に掌底を食らわせ気絶

させた後、次に向かってきた人の首筋に手刀を食らわせ、これも同じく気絶させた。他の2人は鳩尾みそおちを殴り、同じ様に気絶させた。

「へえ。三年を4人も倒す、しかも気絶させるとはすごいな」

「つていう割には結構余裕ですね、先輩。まあ、いいや。そんな先輩に敬意を表して俺の流派の奥義をお見せします」

「そりゃあ楽しみだな。こい！」

その時炎藤君は、世界のリズムに同調するように、自然に走り始めていた。そんな炎藤君を見ながら玲二君は驚愕の顔をしながら言った。

炎藤君が自然に走り始めた。あまりに自然すぎて誰も反応する事が出来ないくらいだった。先輩ですらも反応できなかった。

「行きますよ、先輩。奥義！エフシエカウスエッジ神龍炎舞！」

唸然としていた先輩のもとにたどり着いた炎藤君は、手首から天陣を出現させた。

次の瞬間、炎藤君は天力を使って手に炎を宿し、舞うように攻撃し始めた。二十発位食らったところで、やっと先輩は倒れた。

「ははは、なんだそりゃ。強すぎだろ？」

「はあはあ????先輩だって相当強いですよ?????神龍炎舞を二十発も食らって、立ってられたのは、先輩を含めて十人もいませんから」

「へへ、そりゃ光栄だな。あと俺の名前は田島信二ってんだ。これからよろしく頼むぜ？後輩」

「俺の名前は後輩じゃなくて、炎藤三剣です。こちらこそ。これから色々よろしくお願いします」

「わかった。さっそく悪いんだけど身体起こすの、ちょっと手伝っ

てくんねえ?」

「ああ、いいですよ。よつと」

炎藤君は先輩、いや田島先輩に手を差し伸ばしていた。

「よいしょつと。ふー、サンキュー。じゃあもう行っていいぜ。絡んで悪かったな」

「いえいえ。気にしてないんで、別にかまいませんよ。それでは、失礼します」

「ああ、じゃあな」

そうして炎藤君がこちらに戻ってきた。

歓談と修練

「さて、じゃあ戦闘訓練を始めようか。って、あれ？どうしたの、皆？」

「いやいや、どうしたのって師匠。それはちよつと彼らには、酷ですよ」

「あん？何でだよ。って?????ああそつか。皆は俺の戦ってる時の姿って、見たことないもんな。悪かった」

「いや、別に気にする必要はないけどさ。?????お前、本当に強いんだなって思ってたな」

「まあ、そりゃ当然だよ。なんせ、師匠は導師?????むが！」

炎藤君は唐突に、狩野君の口を抑えていた。炎藤君は一体何をしてるんだろ？と不思議がっていたら炎藤君が狩野君に、小声で喋りかけていた。

「お前、今何を言おうとしていた？っていうか、それ以上言っていたらどうなるか?????わざわざ説明するまでもないよな？」

炎藤君が狩野君に、何かを小声で言っていたようだ。まあ何を言っているかは、わからなかったけど。

分かるのは狩野君が炎藤君に脅されていたということだ。何故わかるのか、簡単なことだ。?????木場君の顔が、大量に汗を流していたからだ。玲二君が見かねて、炎藤君と狩野君を呼んだ。

「おい。俺らを無視しないでくれよ。とつと修練を始めようぜ」

「あ、ああ。わりい、わりい。じゃあ修練を始めようか。そんじゃ、最初は俺とのバトルってことで」

炎藤君は手の骨をポキポキと鳴らしていた。こっちはそれどころじゃなかった。

「ちよつと待つてよ！実践慣れしてた先輩が負けてたのに、そうじゃない私たちが勝てるわけないじゃん！」

その私の抗議は炎藤君には全く意味がなかった

「ハッハッハ。大丈夫、大丈夫。1割ぐらいの力で闘うからさ」

「1割？それって先輩達との闘いに比べるとどれぐらいなの？」

「うーんと、同じぐらいかな？さて、始めるよ。我、求むるは？
??????」

「わあ、ちよ、ちよつと待つててばあ！」

20分後、予想通り私達は地面に伏していた。

???????不思議な事に光一君と狩野君は特に疲れていなそうだった。

まあ、当たり前か。二人とも、本職なんだし。

でもこんなところじゃ止まらない。私にはしなくちゃいけない事があるんだから。そのために、強くなるって決めたんだ。

気持ちは気合十分でも、身体は全然ついてこないから、今はどうしようもないんだけど。だけど、そんな惨状だった私達を、炎藤君は褒めてくれた。

「いやあ、驚いた。中々耐えたじゃないか。凄い、凄い」

その言葉を聞いた玲二君は、拍手している炎藤君を見ながら言った。

「はあ、はあ。凄いつて？田島先輩よりも短かったじゃん。なのに

何で？」

「いやいや、3年間もやってる先輩達と自分達を比べるとか、ちょっとおこがましいよね。」

それに先輩達とやったのは模擬戦であって、訓練じゃないからね。君達と先輩達は修練の量もそうだけど、経験の量が違うんだからな。それに、あの先輩は結構才能がある。あの人はおそらく『称号持ち』だろうね。まあ、どうでもいいんだけど。むしろ、現段階でこんだけ耐えられた君達の方が、俺にとっては驚きだよ。」

誉められているのに、実感がわかないとは思議なものだ。

「初めてこの修練をやったって言うのに、ここまで耐えられるなんてすごいよ。ねえ？」

「そうそう、本部の退魔士でも十分持つか持たないか、ってぐらいなんだから」

光一君と狩野君も、そう褒めてくれた。そう言われると、誇つても良いんだなと思えてくる。

「そうそう、誇つてればいいんだよ」

炎藤君に心を読まれた。まだ会って間もないのに、何で？

「なんでかって？そりゃ、顔に出やすいからだよ」

苦笑されながら、そう言われた。むむう、そうかなあ。私が顔を触っていたのが、面白かったのか。皆、笑い始めた。

「ええ、ちょっと、皆ひどいよ」

そう言っても誰も笑うのをやめなかった。玲二君なんて酷いものだ。お腹を抱えて、ひいひい言っていたのだから。

炎藤君と狩野君、棗ちゃん、光一君と玲二君も笑っていた。それを見ると、怒っているこつちが馬鹿らしくなってきた。

ズキンッ！

唐突に頭に痛みが走った。私、炎藤君の笑顔?????見た事がある？

うつん、そんな筈ない。なにしろ彼に会ったのは、昨日が初めてなのだから。じゃあなんで何だろう。頭の痛みが酷くなってきた。これ以上は、もうさすがに?????無理。

頭を押さえていた、私を不審に思ったのか、炎藤君を先頭に皆が寄ってきた。それを確認したすぐ後に、私は気を失った。

最後に見たのは、炎藤君の深刻そうな顔だった。

EX・保健室にて

星川さんが気絶した後、すぐに保健室に彼女を連れていった。

保健医である、雛森先生は「特に問題はないみたいね。ここは大丈夫だから、あなた達は寮に戻りなさい。ちょっと埃っぽいわよ」と苦笑しながら言った。

退出しようとしたら「ああ、炎藤君。あなたは少し待って頂戴」と声をかけられた。

「はあ、わかりました。皆、今回の訓練は終わり。各自、自主練なり、休むなり好きにして。じゃあ解散!」

雛森先生は、皆が退出したのを確認した後、俺に話かけてきた。

「ごめんなさいね。ちょっとあなたに伝えたい事があるのよ」

次の瞬間、雛森先生の口調と視線が変わった。

「炎龍皇様、お待ちしておりました。現地協力員の雛森楓です」
ひなもりかえで

だと思った。やっぱりこの人か。

「どうも。一応初めまして、ですね。彩炎の龍騎士^{ドラゴンナイト}、炎藤三剣です。あなたの事は、本部で秘書から訊きました。何でも、今まで結構の数の任務をこなして、しかもその任務のほとんどを成功。失敗した数は一桁台とか」

「炎龍皇様に覚えていただけるなんて、身に余る栄光です」

「昨日の内に訪ねたかったんですけど?????すみませんでし

た。もう悪魔が襲撃してくるとは?????予想外とはいかないまでも、予想よりは早かったですね。あそこの情報、まだ漏れてないですよ?」

「一応その心配はないでしょう。緘口令かんこうれいを敷くのに炎龍皇様の名前を使わせていただきました。申し訳ありません」

「いえ、それくらいなら大丈夫です。君?????いえ、あなたを含めて協力員は何人いるんですか?」

「そうですね?????そんなに多くないです。昨日の戦いのせいで、負傷した者が十人位ですので残り十人程度といった所、でしょうか。あと、別に君でもかまいませんよ?」

「そうですね?????それでは、普段通りの行動をしながら、情報を収集、及び俺に報告して下さい。あ、そうだ。何か必要な物資はありますか?あるならそれも報告して下さい。いいですね?」

「はい、わかりました」

う、うつ。その時、星川さんの呻き声が聞こえてきた。雛森先生は、即座に星川さんに駆け寄った。

「星川さん?大丈夫?気分悪かったりしない?」

「あ、雛森先生。大丈夫です。あれ、炎藤君」

「あなたに付き添ってくれてたのよ。良かったわね、どうせなら付き合っちゃえば?」

星川さんは顔を真っ赤にしながら、怒っていた。

「せ、先生、何言ってるんですか。そんな訳ないじゃありませんか。ねえ、炎藤君」

そんな彼女が可愛くて、いたずらをしてみたくなった。

「さあねえ、俺は別にかまわないけど？」

そう言つと、彼女の顔はもつと赤くなつた。

この辺にしとくか。行きたい所もあるし。

「じゃあ、雛森先生、星川さん。俺はこれで」

「う、うん。また明日」

「はい、さよなら。あんまり無理しないようにね」

出る時に小声で「じゃあ、あの件よろしく頼みますよ」と伝えて退出したあと、振りかえつて言った。

「ごめんな。鈴音。と小声で言つて目的の物がある場所に向かった。」

保健室にて

「え？」

炎藤君が保健室を出ていった時、扉の向こうから声が聞こえた。

今、炎藤君確かに、私の名前を呼んだ。教えてないはずなのに私はこう見えて聴力と視力が良いのだ。皆には、内緒にしているけど。明日会った時、訊いてみよう。

「ところで、急に倒れたらしいけど、何かあったの？」

雛森先生がいきなり質問してきた。

「???????なんでかわからないんですけど、炎藤君の笑ってた顔を見た時に、思ったんです。私はどこかで彼の顔を見た事があるって。でも、そんなことないはずなんです。???????だって彼は昨日転入してきてそこで知り合ったばかりなんですから。その後、なんでか分からないんですけど、頭が痛くなってきたんですよ。あはは、おかしいですよね」

雛森先生はちよつと考えた後、私の目を見ていった。

「ねえ星川さん。あなたは彼の役職を知ってるかしら？」

「先生は知ってるんですか？」

内心は驚いていた。彼が、聖龍騎士団の師団長である事を知っている人は、少ないはずだ。じゃないと、彼の事は学校中で有名になっっているはずだから。そんな私の質問に、先生はあっさりと答えた。

「そんな質問をする、ってことは知っているのね。彼の役職は聖龍騎士団の第一師団長であり、世界に五人しかない導師様の一人よ」

導師？先生、今確かに導師って言った。確かに言った。

導師 それは普通の被魔士の少なくとも、二十倍以上の天力を持つ者に与えられる称号だ。だが、そんなに天力を持っている人は稀少だ。故に、世界に五人程度しかない人達なんだ。

ちなみに、エクソシストは最低でも一般人の三倍の天力を有している。

炎藤君は師団長と導師の両方を兼任してるっていうの？

驚いている私を見て、言った雛森先生の方が驚いていた。

「あれ、炎龍皇様から訊いていない？参ったなあ。どうしょ」

「ちよつと待つて下さい。先生、炎藤君は導師も兼任しているんですか？」

「その口振りだと?????彼が炎龍皇だという事は知っているみたいね。彼はね、まだ若干十六歳なのに沢山の二つ名を持っているの。まあ、彼はあの戦争を生きぬくような凄い人なんだけどね。

それは置いといて?????その一つにね、鎖・十字架^{カテ・ナクロッチェ}というものがあるの。その二つ名の由来はね、あらゆる物を拘束できる力を持つているから、なんだって」

「いえ、知りませんけど。?????それがどうかしたんですか？」

何でそんな事を私に言うんだろつか？雛森先生は何を言いたいんだろうつか？

「何でもね。その力は応用次第で、あらゆる物を封じることでもできるんですって。

それこそ、人の記憶だろうとなんでもね。でも一般の隊員で、その

能力を見た事がある人はいないから、確証はないんだけど????
???

何だって!??もしもそれが本当なら????私は昔、彼と会った事があると思った事の証明にもなる。

「間違つてたら、ごめんなさいね。でも、そういう可能性がある事も忘れないでね」

雛森先生がそう言っているのを聞きながら、私は色々考えてみたが分からない。

その事も明日、彼に訊いてみよう。と考えながら私は保健室を退室した。

わからない その事が今一番怖い。誰よりも何かを知りたいとは言わない。

ただ、それでも自分の事で分からない事があるのが怖い。そう思った瞬間、私は走り始めていた。どこにいるかなんてわからない。それでも私には確信があった。

目指すは炎藤君の居るであろう場所?????演習場だ。

EX・模擬戦

保健室を退出して、目的の場所に向かってから十分後、俺は演習場に戻っていた。そこには、予想通り拓也がいた。

まあ、そうだろうな。お前は、いると思ったよ。

「予想通りって顔してますね。まあ、当然でしょうね。あんなんは俺らにとって、準備運動に近いんですからねえ」

「さて、じゃあ俺ら流の修練を始めるとするか」

「そうですね。じゃ、ルールどうします？」

「そうだな？？？？じゃあ、無手の近接戦闘にするか。天術込みだと、さすがに俺に分があるからな」

「そうですね。あなただけでしょうから。聖龍騎士団の師団長と、導師の兼任なんて無茶な事をしているのは」

「あんまりでかい声で言うな。ばれたら面倒なんだから」

俺の数ある二つ名のやつもそうだけど、な。

そのころ雛森先生が鈴音に話しているとは、彼は夢にも思っていなかったが。

「このコインが地面に落ちたら試合開始だ。いいな？いっておくけど、地面に倒れた方が負けだから」

「分かってますよ。いつもどおりじゃないですか」

「一応な。じゃあ、いくぜ」

コインを上弾いた。俺達は二人同時に構えた。

キンッ。地面にコインが落ちた

拳、蹴り、肘、膝、攻撃できるものなら何でも使い、相手にダメージを与える。それが俺ら師団長、いや騎士団にいる騎士達の戦い

方。

騎士たるもの、たとえ血まみれになろうとも、傷だらけになろうとも強くあれ。

指一本でも動くのなら。力なき民を守るために、戦え。そのために?????強くあれ。

それが、騎士団の皆が力のない人達を救うために決めた使命だ。

「奥義、天神爪牙に連結、天神乱舞！」

「千天斬光流、奥義。光天驟雨に連結、天地斬光撃！」

拓也は千天斬光流。俺は神影無双流。俺達に限らず、各属性の龍王たちは自分の流派を持っている。

そしてその流派には、各属性の名前が入っている。各師団長は自分の流派を持つことを義務づけられているのだから。

だけど俺はその当時すでに流派を持っていた。俺の流派はその歴史と使命上、名前を変えるわけにはいかない。そのため、俺は統帥に頼みこんで、なんとか特例として、認めて貰った。だが俺の流派を継いだ者は数少ない。

約七師団、総勢一万六千人の団員の中でも三十人だけだ。その全員、騎士団の中でも上の位にいるけど。副団長とか、その他色々。

そんな周囲から見たら、過激な戦闘を?????俺達からすれば普段通りの修練を、十分ほど続けていたら拓也が体力切れで倒れた。まったく情けないな。さすがに無理を言いすぎてるかな？

「はあ、はあ?????????疲れた。ちょっとは、手加減して下さいよ」

「してるつての。これでも五割ぐらいしか、力を使ってないんだぜ？」

「ええ。どう見てもそうは見えないんですが。っていうか、それ『雷』との模擬戦と何が違うんですか？」

「雷^{ライ}との模擬戦は八割ぐらいだから、まあそれよりは弱いってことだ」

「信じられないんですけど。あれで五割ってところが」

「お前はちよつと戦線を抜けて長いからな。仕方ないし、むしろここまで出来た事を誇れよ。なかなかやるようになったじゃん。戦闘力もなかなか上がってきたようだしな。ま、次、頑張れよ」

EX・模擬戦2

その言葉に拓也は苦笑しながら返事をした。とはいっても最近は何んか皆実力を上げているから手放しに誉めることはできないんだけど、な。

「そうですねえ????。あんまりそんな感じしないんですけどね」

「まあ、そんなもんだろ。仕方ねえよ」

そんな会話をしている俺達のところに思わぬ人物が現れた。????。星川さんだ。彼女が何故、こんなところに?

「あれ、星川さん。どうしたの?っていうか、身体、大丈夫?」
「ありがとう、光一君。大丈夫だよ。それよりも炎藤君。ちょっと用事があるんだけど????。いいかな?」

用事?また、今度にすればいいのにそんな急がなければならない用事って?

そんな疑問を抱いていた俺に向かって喋りかけた。

「いいけど?何を訊きたいの?」

「ねえ、炎藤君。私と(・)あなた(・)って(・)昔どこ(・)か(・)で(・)会った(・)事ある(・)?」

ツ!どうして、今の彼女がそんな事を口にするんだ!?

まさか????。もう解けたって言うのか?いや、そんなはずはない。そんな感触はなかった。ならば、なぜだ?

そんなふうに考えている俺を不審に思っただろう。星川さんは

もう一度強く俺の名前を呼んだ。

「炎藤君！どうなの？本当なの？ねえ、教えてよ！」

「?????どうして、そんな事を訊くの？っていうか誰がそんな事を言ったんだ？」

何とかそれだけを口にすることはできた。さてこの後どうしよう。
星川さんは律儀に答えてくれた。

「雛森先生が言ってたの。あなたが導師でもあるって教えてくれたよ」

「あの人か！はあ、????余計な事をしてくれたもんだな。まった
く」

「で、どうなの？本当なの？」

わからない、ということが怖いんだろう。そりゃそうだ。

自分の事が突然、分からなくなってしまったんだ。無理もない。

だけど、この（・・・）こと（・・・）だけは（・・・）、話すわけ
にはいかないんだ。

「ごめんな、星川さん。この事だけは話す訳にはいかないんだ。い
や、いつか話す事になるんだろうけど。今は?????無理なん
だ。もう一回言うけど、本当にごめん！」

その返答は俺の予想以上にあっけなかった。あまりにあっけなさ
過ぎて、逆にこっちが拍子抜けしてしまった。

話の終わり

「うん、わかった。いいよ」

「え？いいの？」

俺はその答えに啞然としていた。

「うん。だって、いつか話してくれるんでしょう？それなら別に良いよ。私の名前を知ってるのもそうなんですよ？」

「え、うん。そうだけど。ひょっとして????聞こえてた？」

恥を忍ぶでの質問はあっさりと首肯されてしまった。

「扉を挟んでたんだよ？それなのに、なんで？」

「私、視力と聴力が良いから。私の得手は銃だもん。狙撃銃、拳銃、機関銃。何でもござれ、って感じだから」

「ああ、そうなんだ。なあ、光一は知ってたのか？」

「まあ、そこそこは知ってましたけど。おっと、失礼」

唐突に光一君の携帯が鳴り始めた。あれ、語る人が変わってない？まあ、いいや。

光一君の携帯に來たのは電話じゃなくて、メールだったようだ。結構長かったらしく、読むのに三、四分ほど掛かっていた。光一君は読むのが凄まじく早い。

昔、光一君が読みたがっていた本をたまたま私が持ってたから、貸してあげたら一時間ちよつとで返しに來たのだ。四百五十ページ近くあった本を、だ。しかも内容を全部理解していた。

メールを読み終わった光一君に、炎藤君が訊いていた。

「で、内容は？もしかして？？？小隊戦の日程が決まったのか？」
「ええ。もう二学年のほぼ全員が小隊を組んだため、小隊戦の日程を今まで組んでいたらしいです。」

わざわざ確認に行ったんですか？まあ、いいや。それで話は戻りますけど、その会議がつい先ほど終わったらしいです。俺達第二十七番小隊は一週間後、第三十二番小隊と戦うことになるようですね。あ、星川さん。この事は明日まで、誰にも話さないでくださいね。なんでって？そりゃあ、この情報がAAランクに指定されてるから
ダブルキ
もしばれたら？？？？？そうですね、反省文十五枚ぐらいは、書かされるんじゃないかな？まあ、喋らなければ、そんな事にはならないから。大丈夫だって」

反省文十五枚って？？？そんなのやってたら日が暮れちゃうじゃん。そんなのはごめんだよ。私は書類仕事とかの類が苦手なのだ。私は口を押さえながら頷いた。

そんな私を見て、二人は同時に、顔を見合わせて手で口を押さえた。だけど堪え切れなかったらしく、二人はそんなふうにいる私を見ながら、笑い始めた。

「ちょっと二人とも、そんなに笑わなくなつたていいじゃない！ちょっとー！」

そう苦情をいっても、なんのそのって感じで笑い続けた。一分ぐらいたった頃に、笑い疲れたのか、二人とも笑わなくなった。

「ちょっと！二人とも、ちょっとひどすぎるよ！」

むくれていた私に、二人ともちゃんと謝罪した。ここらへんが、玲二君や棗ちゃんとは違う、いい所だ。二人はそのまま調子に乗るだけだ。

「いやあ、ごめんごめん。笑いすぎたよ。悪かった」

「ごめんね。俺も確かに笑いすぎたよ。ホントにごめん」

「わかってくれればいいよ。もうないようにしてほしいけどね。？
？？？つてあれ？」

私の体がまた傾いて意識が遠くなった。今度は炎藤君が身体を支えてくれた。だけど、そこで注意された。

「まだ起きたばかりだから、身体が本調子じゃないんだ。とつとと寮に戻って休むんだぞ」

「三剣は医学の知識も持つてるから、従った方が良いよ」

「そうは言うけどさ、私は炎藤君に訊きたい事があったから、ここまで来たんだよ？」

それなのにさ、この扱いはひどくない？」

「それに関しては悪かったって。でも、俺は話せないんだ。仕方ないだろ？拓也、悪いんだけど高田さんと呼んでもらえるか？星川さんを女子寮に連れて行ってもらうからさ」

「あ、それなら私が携帯で呼ぶよ。そっちの方が早いでしょ？」

「まあ、出来るならそうしてもらった方がいいんだけど？？？大丈夫なの？」

「大丈夫だって。それぐらいならできるよ。心配しすぎ」

その後五分ぐらいで棗ちゃんが来てくれて、女子寮の私の部屋まで連れて行ってもらった。その道中ですごく怒られたけど。

なんとか部屋に入ったけど、あんまり痛みがきつかったから、すぐにベッドに倒れた。

眼を閉じるとすぐ意識は深い闇の中に落ちた。棗ちゃんが何か言っていたけど全然聞こえなかった。いや、意識が落ちる直前に変な声が聞こえた。

『我が契約者はいつ楔が解けて、力に目覚めるのだろうか?』

あの声は一体何だったんだろう?

教室での諍い(1)

あれから、二日後の教室の昼休み。クラスは特に、これといって何も変わらなかった。

昨日小隊戦の発表があつたにもかかわらず、だ。まあ、重苦しい雰囲気になられても、困るんだけど。どっちなんだよ、と言われても仕方ないんだけど、そこそ楽しい雰囲気ならいいな、と思つたぐらいなんだから仕方ない。うん。仕方ない。

「あんた、さつきから誰に向かつて喋つてんの？ちよつと意味分かんないわよ？」

棗ちゃんが話しかけてきた。誰？うーん。誰に向かつてやってんだろ？わかんないや。

「分かんないってそんなんでいいの？あんた」

むう、ま、いいじゃん。独り言だつたんだからさ。

「ま、いいけどさ。っていうかさ、私達の試合が初日のしかも初戦ってどういうことよ。」

緊張でつぶしたいのかしら？ねえ、どう思う、鈴音？」

また、始まつた。棗ちゃんのちよつとした悪い所、それは理不尽な事があると、周りの人にいちいち愚痴る所だ。今の周りの人つて言つのは私の事なんだけど。

「ねえ、鈴音。訊いてる？」

「でもさ、棗ちゃん。大丈夫だって。私達の本来の実力を発揮でき

れば勝てるって」

「ほう、それは聞き捨てならないな」

突然、隣の集団からナイフのような鋭い視線を持った生徒が出てきた。

このクラスでトップ級の成績の保持者である、日向ひゅうがかい權君だ。気づいたら、クラスの皆がこちらに注目していた。

「何か用？日向君」

「用も何も、僕は今の発言を撤回して欲しいだけさ。このSクラスで、学年代表のこの僕が団長を務める僕の小隊に勝てるだって？？？？？ふざけた事を言うのは止めてほしいな」

Sクラスというのは、文字通り、Sランク級の素質を持つ生徒が集められているクラスだ。つまり、このクラスでトップを取っているという事は、学年最強の地位に居ることの証明になるんだ。

「はいはい。撤回するわ。これでいいんでしょう？」

「良い訳ないだろ。そんな明らかにふざけた態度で僕が満足すると思ってるのか？」

そうだな。土下座でもしたら考えない事はないよ？」

このゲスがつ。彼の瞳の奥には明らかに侮蔑の念がもっていた。

「そんな事をする必要はないよ。星川さん」

炎藤君が会話に介入してきた。ちょっと助かった気がした。

「ん？君は確か？？？？？炎藤君だったかな？何か用かい？出来

れば、話の邪魔はしないで欲しいんだけどな。それとも、君が土下座でもしてくれるのかい？しかし、僕としては?????」

「黙れ。それ以上、その醜い口を開くな。声を出すな。虫唾^{むしず}が走る」

炎藤君の脅し文句は強烈だった。その声は低くて何もしてなくても切れそうなくらいに鋭かった。その一言は日向君にとっても予想外だったのか、固まっていた。クラスの皆も耳を疑っていた。光一君と玲二君は、はじっこで笑っていたが。

一番最初に動き出したのはさすがと言うべきか、日向君だった。

「君、何を言っているのか分かっているのか？それは、この僕に喧嘩を売っていると判断するが?????良いかな？」

「別に構わないけど？そうだったら、どうするって言っただ？」

「決まってるじゃないか?????ここで潰す」

「いいけど、君じゃできないよ。君は?????いや、君程度じゃ俺に勝てない」

「それはどうかな！」

日向君は流れるような動作で制服の袖からナイフを取り出し、突きを繰り出した。その攻撃にも炎藤君は何でもないかのように対応していた。

「それが何か？」

「何っ!？」

あり得ない、というよりとんでもない事が起きた。炎藤君は真剣白刃取りの要領でナイフを止め、そしてナイフをそのまま折ったのだ。

確かに、うちのクラスでも真剣白刃取りをできる人はいる。だ
ど、問題なのは捕まえたのが、人指し指と中指だったということだ
「これで、終わり？じゃあ、これは正当防衛だぜ？」

炎藤君は、日向君の鳩尾に向かって、コークスクリューを三発ほ
どぶつけた。衝撃音が凄くてこっちがびっくりした。日向君の体が
一瞬、空中に浮いた。日向君は受け身も取れず、転がって噎せてい
た。

教室での諍い(2)

「へえ、これぐらいならまだ耐えられるんだ????。なら、もう二、三発ほどぶち込んでも、大丈夫だよな！」

さすがに、これ以上はまずいと思ったので炎藤君を止めた。

「え、炎藤君。さすがにもういいって。あと、かばってくれてありがとう」

「いや、二人が無事なら別にいいよ。っていうか、本当に大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。怪我とかはないし、ね？ 棗ちゃん、大丈夫だよね」

「え？ ああ、うん。助けてくれて、ありがとうね」

そんな会話をしていると、クラスの皆が冷やかしてきた。

「ひゅー、ひゅー。暑いな。別の意味で」と言ってきたのはクラスメイトの紫藤浩二君。

「もう。こんな所でいちやいちゃしないですよ」「こっちは中井可奈ちゃん。」

「鈴音、もう転入生君に手を出したの？ お盛んなことで」「こっちは越前青葉ちゃん。」

顔を真っ赤になった私を見て、冷やかしはさらにヒートアップした。

「もう！ 皆、いい加減にして！ 炎藤君も何とか言つてよ」

そう私が言うと、炎藤君は少し黙って考え始めた。そしてこう答

えた。

「うーん。じゃ、コメントは控えさせていただきます」

そう炎藤君が言っているとクラスの皆、笑い始めた。いつものクラスの空気が戻ってきた。

「ふざけるな！こんな奴に、僕が負ける筈がないんだ。これでも喰らえ！」

みると日向君が天陣を構築していた。皆が構えた。炎藤君は苛立ちで顔がゆがんでいた。そして日向君の方に走り始めた。

「そんなずさんな術式で、俺を倒せるわけねえだろうが！なめるなよ！」

炎藤君は天陣に手を突っ込み、構築陣を解除し始めた。玲二君が炎藤君を止めようと呼びかけていた。

「無茶だ！やめろ、炎藤！お前、死にたいのか！？」

そんな玲二君を止める人がいた。 光一君だ。

「落ち着きなよ。玲二、大丈夫だって。彼は」

「何が大丈夫なんだよ！？光一、お前だって知ってるだろ？たとえば天陣に介入しても、完全に術式を解かない限り、発動しちまうんだぞ。低級の術式を解くのに、俺達は難儀していたぐらいだったじゃねえか！それぐらい、お前だって覚えてるだろ！？」

「分かってるよ。でもね、玲二。あれは無言^{ノー}詠唱式^{スベル}の術式だ。無言詠唱式の術式は、詠唱式の術式に比べて、威力が格段に落ちるんだ。

だから、当たっても大した威力はない。
多分、俺らの練習用の術式ぐらいの威力しかないんじゃないかな？
それに、ほら、もう終わるみたいだし。見てみなよ」

光一君の専門的な説明に聞き入って忘れてたよ。皆の視線が二人の方に向いた。日向君の術式は、完全に消されていた。

炎藤君は解いた瞬間に、日向君の鳩尾に強烈なボディーブローをくらわした。

「はあ、はあ。そんな馬鹿な！何故、いとも簡単に術式を消す事が出来るんだ？俺でも、まともに成功した事ないのに！」

「それは自惚れたよ。イタリア本部に行ってみろよ。あんたぐらいの実力を持つてる奴なんかいくらでもいる。その程度であまり調子に乗らない事だね。まだ学生で、しかもこんだけの実力あるから褒められてるだけ。

確かにあんたは努力すれば強いよ。だけどあんた、驕ってばっかでまともに努力してないだろ。今のあんたに必要なのは、ちゃんと修練することだね」

ある意味、っていうかすんごい言いたい放題だった。だが、炎藤君の先ほどの実力を見れば、皆が納得していた。

「くっ！まさか、だからか？だから、親父は褒めてくれなかったのか？」

「さあな。俺にとってはどうでもいいことだよ。でもな、あんたがもし、親父さんに認めて貰う為だけに、戦って来たって言うんならあんたはもう戦うな。そんな半端な覚悟で、戦場に出てくるな。はつきり言って、迷惑だ。あんたみたいなタイプは、戦場に出てても味方を混乱させるだけだからな」

キーン、コーン、カーン、コーン。ちょうど良く、昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

「はい、皆。昼休みは終わってたぜ。次の授業の準備を始めろよ」

炎藤君は、上手く皆の気をそらして、席に座らせた。

その後の教室

その五分後、授業にやって来た風間先生が、びっくりしていた。な
んでかって言うと、教壇に折れたナイフが刺さっていたからだ。炎
藤君の顔を見ると、凄まじい量の冷や汗を流していた。修練の時は、
一滴たりとも流していなかったのに。

炎藤君と私と棗ちゃん、で、風間先生に事情説明をして、なんとか
事なきを得た。

「ふむ。じゃあ、こういう事か？星川と高田の会話に日向が絡んで
きて、それで、炎藤は星川と高田をかばった、と何か間違ってたか
？」

「いえ、先生。それであってます」

「先生、ちょっと待って下さい」

先生を呼び止めたのは、日向君だった。なにか、言いたい事でも
あるんだろうか？

「ん？何だ、日向。何か、言いたい事があるのか？」

「はい。僕は彼に向かって、天術を使用しました。その点も踏まえ
て厳正な処罰を下してください。以上です」

その発言を聞いた先生は眉をひそめて炎藤君に訊いた。学園内では
修練場などの例外を除いて、天術の使用は固く禁じられているか
らだ。

「それは本当か？炎藤」

その時私は、はつきり言って????驚いた。わざわざ、しか

も、自分が不利になるような事を、言うとは思わなかった。後で、その事を炎藤君に訊いてみると彼は、こう答えた。

「ああ、あれ？彼はさ、あれで結構プライドが高いんだと思う。俺の知り合いにさ、貴族の人がいるんだけど、その知り合いがこう言ってた。

『本当にプライドがある人間って言うのは、まず自分の経歴を自慢しない。次に、己の非は否定しちゃいけない。その状態から前と同じ?????或いは、それ以上の信頼を得るには、めちゃくちゃ努力しなきゃいけないだろ？そして、そんな努力が出来る奴は本当の貴族なんだ』ってな。つまり、彼の家系は結構な御家柄ってことさ。そして、その家に恥じない活躍をしよう。そう思ったから、彼はあんな事をしたんだと思うよ？」と言っていた。

それとはかく、炎藤君はこう答えた。

「はい。彼は確かに天術を使いました。しかし」

「しかし?????何だ？言いたい事があるなら、ちゃんとやっておけよ」

「しかし、彼なりに必死だったんだと思います」

「必死？どういう意味だ？」

「先生、突然現れた人間に今の場所を奪われたら?????どうします？」

「どうするって、お前?????そりゃ、何とか奪い返そうとするだろうな」

「それでも?????奪い返せなかったら、どうします？天術の件に関しては、何も考えられなくなって、取ってしまった行動だったと思うんです」

「つまり、お前は何が言いたいんだ？」

「要するに俺が言いたいのは、天術の件は、見逃してくれませんか？という事です」

「ふざけるな！」

そう叫んだのは日向君だった。

「ふざけるなよ！俺の覚悟を汚すな！ありのままの俺に罰を受けさせる！そうじゃなきゃ意味が無いんだ！」

「黙れよ。誰が、ただでお前を許してやってくださいって言った？黙ってそこで座って訊いてろ。先生、今度の小隊戦であいつの小隊が俺達の小隊に勝ったら天術の件はなしで、俺んとこの小隊に負けたら?????そうですな罰を一・五倍ぐらいにしてください。こんなんでどうでしょう？」

「どうでしょうって?????まあ、それでいいなら、俺は別に構わんが」

「別にいいよな。エリート君」

「望むところだ！絶対に倒してやる」

「ふっ。その調子で頑張れ。では、先生。授業をどうぞ」

「あ、ああ。じゃ、授業を始めるぞ。全員教科書百七十四ページを開け」

その場はそれで治まり、いつも通りの授業が始まった。そして、放課後に炎藤君と日向君は、決闘書にサインを書いて正式な決闘となった。

放課後

私はその間に、模擬戦闘用の武器使用の許可申請書を提出した。まあ内容は名前の通り。模擬戦闘用の武器の使用許可を貰う事だ。

模擬戦闘用と言うだけあって、刀や剣は刃抜きをされているし、拳銃は弾がゴム弾。打撃武器などは、叩きつけても相手がケガしないように、柔らかくなっている。

弓に関しては矢が当たっても大丈夫なように、矢の先が衝撃吸収材で包まれている。

まあ、確かに怪我はしない。だけど、どれも当たったら、実戦では負傷する。それを実感させるために、特殊な戦闘服を着るように指定されている。

そして、その服はダメージが致死量に至ると、特殊な振動を、着用者に与える。この特殊な振動は、自分は死亡したんだぞ、と伝えるための物なんだ。

炎藤君や、皆の分の申請も済ませたところに、炎藤君が武器の運ぶのを手伝ってくれた。

「あ、星川さん。手伝いますよ」

「炎藤君。助かるよ。私達のチーム合計で六人でしょ？もう運ぶのどうしようって、考えてたところなんだ。あゝ助かった」

その道中に、いくつか彼に質問した。さっきの質問もその時にしたんだ。

「ねえ、炎藤君。ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「はい？なんですか、星川さん。何でも訊いてくれて構いませんよ」

「なんで模擬武器の申請書なんて出させたの？」

「ああ、その事ですか。それはですね、皆の獲物を使った上での実

力を知りたかったからなんですよ」

「へっ？何で？」

「何でって、そうですね。試合の予定日が、予想よりも早かったからですね。俺の予想だと、もう二、三日余裕があれば、もうちょっと後でもよかつたんですが？？？。まあ、結局、いつかやることになつてたんですけどね」

「いや、そうじゃなくて。個人で自分の得意な武器を言えればいいんじゃないの？って話」

「ああ、そういうことですか。実力が分かんないと、基本的なフォーメーションとか、組む事が出来無いじゃないですか」

「え？そういうのって、炎藤君が考えてくれるの？」

「ええ、そのつもりだったんですけど？？？。要りませんか？おせっかいでした？」

「うつん。そんなことないよ。いやあ、私が考える物とばかり思ってたからさ」

炎藤君は軽く笑いながら答えた。

「ははは、そんなことはしませんよ。星川さんにやつてもらうのは実戦、と言うよりも試合の時の指揮。フォーメーションとかは、さすがにこっちで考えますよ。あ、でもたまに、相談したりすることもあるでしょうから、その時は頼みますね」

「うつん、わかった。あつと、ついた。炎藤君、運ぶの手伝ってくれて、ありがとうね」

「いえいえ、どういたしまして。別に気にする必要はないよ、星川さん」

「そういえば、そろそろ名前で呼んでよ。それと、敬語なんか使う必要ないから」

「うつん。わかった。じゃあ、鈴音って呼ばせてもらうよ。ところで、皆どこだろ？」

「止めるの早！まあ、いいや。あそこみたいだよ。行こう」

ある一画で、皆それぞれ喋ったり、体操したりしていた。皆こっちに気づいて手を振っていた。

「ありがとう、鈴音。ところでさ、二人ともまた一緒なんだね。あれ、ずっこけてどうしたの？鈴音なんかあった？」

「今の発言のせいだよ！っていうか、怪しい所なんて、何にもないんだから！はい、弓と矢！」

「もう、そんなに怒らないでよ。ちょっとしたジョークじゃない。ね？」

そんな事を言う人がいけないんだよ。と棗ちゃんに注意した後、私と炎藤君で武器を渡していった。

ちなみに、私は拳銃。炎藤君と狩野君は刀。光一君は剣。玲二君は槍。棗ちゃんは弓。

自分達の二つ名

「鈴音。あんたの銃、名前なんて言うの？」

「えっ？どの銃の事？」

「どの銃って？？？？？鈴音。あんた、何丁銃持ってきたの？」

「えっ？えーと、六丁ぐらいかな」

「「「「六丁！」「」「」」」」

なぜか、皆素っ頓狂な声をあげていた。どうでもいいけど、素っ頓狂って何か言いにくくない？ほんとにどうでもいいんだけど。

「鈴音？その拳銃、六丁？見せて貰っても良い？」

「えっ？別に良いけど？」

まず手に持っていた二丁を持ってもらってから、太腿のホルスタ―にひっかけていた二丁と制服の裏に作ったポケットに入れていた二丁を見せた。

「鈴音、ひょっとしてこれ、いつも持ってたの？」

「ううん。いつもは教室のロッカーとか寮の自分の部屋にあるんだけど、今日は使う、って言われてたから持って来たんだけど」

「そうなんだ。ちなみに、それぞれ名前を訊いても良い？」

「うん、別にいいよ。棗ちゃんが持つてる銃の名前は、ヴァルス・ヘルブス。私が自作した拳銃なんだよね」

この拳銃には光一君が食いついた。

「へえ、この銃自分で作ったんですか。すごいですね」

「えーと、話し続けていいかな？」

「ただ、ちょっと食いつき過ぎだと思う。すごいまじまじと見ていた。」

「ああ、ごめん。自作の拳銃って、初めて見たものですから。ありがとうございます。はい」

「どういたしまして。じゃ、次はポケットから出したこの銃。FN ファイブ - Five - Seven セブン。この銃は、世界でも結構小さい方の拳銃なんだけど、貫通力は結構ある拳銃なんだ。といっても威力に関してはサブマシンガンのプロジェクト90の方が上なんだけどね」

炎藤君以外はへえ、そうなんだ。とか呟いていた。炎藤君は、準備運動輪しながら皆のつぶやきを訊いて微笑を浮かべていた。

「じゃあ、最後にこの銃だけ。この銃はベレッタM92FS。アメリカの警察で使われている拳銃。まあ、メジャーな銃ってやつだね。これで拳銃の説明は終わり。他に訊きたい事はある？」

「ねえ、鈴音。銃の装填出来る弾数は？」

「えーと、ヴァルスは天力の量次第。ファイブセブンは二十発。ベレッタは十五発ってところかな」

「へえ、そんなに入るんだ」

それを訊いた玲二君が、爆弾発言をしてくれた。

「やっぱ、銃の巫女の称号は伊達じゃないんだな」

サラッと人の二つ名を明かすんだから玲二君には困ったものだ。

「ちよつ、玲二君！そんなこと、今言う必要ないから！」

当然、炎藤君が首を傾げながら、不思議そうな顔をしていた。
（こんな風なりアクションをされるだろうな、と思ったから言わないでおいたのに！もう、なんて事してくれんのよ！）

言葉を込めて、玲二君を睨みつけた。言いたい事は伝わったが、意味がなかった。

「いやゝ、悪い。てつきり、もう言ったもんだと思ってたからさ。あははは」

「あははは、じゃないよ！全く！」

「あのさ、結局、銃の巫女ってどういう事？」

炎藤君が置いて行かれないようにすぐさま訊いて来た。私が慌てると、棗ちゃんが説明を始めた。棗ちゃん、頼むから話さないで！そんな私の希望を無視して棗ちゃんは話し始めた。

「実習って、それぞれの専門武器の学科に行くじゃん。鈴音はさ、普通は一つの学科を取る所を拳銃学科、狙撃銃学科、機関銃学科、散弾銃学科とか、まあうちの学校にある、全部の銃系統の学科を取ってるのよ。全部で八つぐらいかな？」

しかも、その全部の学科成績で一番を取ってるの。筆記でも技術でもね。それで付いた称号が――

「銃の巫女、と言う訳ですね。なるほど、納得。?????でも、全ての学科で一番ですか。凄いを通り越して、恐ろしいですね」

「へへへ、そうだろ。俺も初めて訊いた時は、さすがに驚いたけどな」

これにはさすがに文句の意味も含めてお返しをしてあげた。

「玲二君が誇る事じゃないじゃん。自分だって星刃・槍帝セクト レギンスって呼ばれてるんだから、似たような感じじゃん。それに自分の事じゃなくて、人の事を誇ってどうすんの」

「星刃・槍帝セクト レギンス? 何それ、どういう事?」

炎藤君はこの事に関しても、不思議そうにしていた。

「それがさ、実は玲二君ってね。槍術の業界じゃ、超が付くほどの有名人なんだって」

「へえ、何でそんなに有名人なの?」

「玲二君って、槍術の世界大会で優勝した事があるんだって。しかも最年少の年齢で」

「ふーん。ちなみに、何歳のころに取ったんだ?」

「何歳だったけ? 玲二君」

玲二君はため息交じりに説明してくれた。いい気味だよ、ほんと。

「はー、あんまり言いたくないんだけどな。十歳の頃だよ。しかも三年連続で取ったから、余計にな。それに俺はその大会の最後の優勝者だからな」

「最後の優勝者? どういう意味? 言にくい事だったら、別に言わなくても良いぜ」

「別に構わねえよ。何でかって言うとな。大会が行われて、表彰式が終わった直後に、悪魔が急襲してきたんだよ。その日に主催者や大会参加者の多くが死んだよ。俺は????? いや、俺の槍術は実戦向けの技術だったからな。」

その技術で客だけは、何とかシエルターに逃がす事は出来たんだ。その直後にな不意打ちで魔術の一発が、肩に当たってよ。そいつは何とか倒したんだけどよ。気付いたら囲まれちまってな。魔術の衝撃で肩に力が入らなくてよ。

そこで思っただよ。俺ここで死んじゃうのかな？ってな。でも、次の瞬間だよ。悪魔達がな、虹みたいな光に撃たれてな、次々と倒れていったんだよ。当時はよく解んなかったんだけど、その光は天術の光属性を色んな属性でコーティングした技らしい。

でだ、その後中年ぐらいのおっさんが出て来てよ。『よく頑張ったな。君のお蔭で観客は助かった』とかいってな、俺を医療現場に連れてってくれたんだ。

後で俺を治療してた人に訊いたんだけどな。その光を出せるのは、その人とその人の弟子だけらしい。まあ、俺の命の恩人だよ。それは置いといて、主催者が死にまっただけだからな、もうやらないってことになったんだ」

「悪い、坂田君。それ、俺の師匠だわ」

「はあ？どういうことだよ？」

唐突過ぎて、話が理解できなかった。何？どういう事？炎藤君はこちらに手を出して、次の瞬間、掌一杯に虹色の光が溢れて来た。

「綺麗だね。どうやってたら、こんな風に来るようになるの？」

「悪い。これは話す訳にはいかないんだ。で、こんな光だろ？君が見た光って」

「ああ。確かにこんな光だった。お前の師匠ってどこにいるんだ？できれば、お礼が言いたいんだが」

「うーん、どうだろ。イタリアで俺の養ってる子供達に、天術を教えて貰っているからな。今度、イタリアに行った時に伝えとくよ」

「ああ、わかった。頼んだぜ？」

「ああ。任せとけて。で、篠月さんは何かないの？そういう称号とか」

「ん？あるわよ。聖光の（・）弓使い（エクスペル）って称号なんだけど。何でそんな名前なのか、私って光系統の術式が得意なのよ。矢にも光属性をエンチャントするしね。しかも、私って特異な

体質で光属性の術式を使うと、聖属性????つまり、七大属性ではない属性が混入するんだって。あ、ちなみに弓も大抵は百発百中なのよね、私。これはどうでもいいかな？」

さらつと自慢するけど、棗ちゃんは確かに凄い人だ。自分で自分の事を自慢するぐらいの実力は、本当にある人なのだ。

「ふーむ。そっか、何気にこのチームって、全員が称号持ちなんだ」

作戦会議

『称号持ち』????それは一学年、二百人近くいる中で選ばれた、エリートなエクソシストの事を言う。この学校では、大体一学年三十人近くが『称号持ち』に認定される。

その二十人は各クラスに分けられる。二十人の中でも特に優秀な人がSクラスに入る。ちなみに、狩野君も称号持ちだけど、ぎりぎりでクラスに入りきらなかった。彼とあと二人はAクラスに在籍している。

狩野君の称号は聖剣の（・）^{エンセイフ}剣皇^{レクサス}。聖剣を製生する事が出来る異能を持っているから、本部で与えられた称号であるという事らしいらしいと言つのは、彼の異能を誰も一回たりとも見た事はないのだが。

だから聖剣を見られるのかと、けっこう楽しみにしていたんだけど。今回の模擬戦では、模擬武装を使うようだ。本当に残念だ。うん。

「それじゃ、模擬武装を使った修練を始めるよ。皆、それぞれ自分の武器を持って、適当に配置について。それじゃ、今回の修練では四対二だから、二の方は俺と光一。四の方は残りのメンバーね。編成は皆で決めてくれ。攻め方は自由だから。俺達が降参したら、合格。そこで模擬戦は終了。ルールはそんなもんな。じゃ、頑張れ」
「じゃあ、そういう事みたいだから、頑張つてね」

聖龍騎士団の師団長二人に『称号持ち』とはいえ、一般の生徒が敵う筈がない。だけど、やらなきゃいけない。将来、自分よりも強い悪魔に遭遇しないとは限らないんだ。力は有った方が良いに決まっている。私には、やらなきゃいけない事があるんだから。そのた

めに、私は強くなると決めたんだ。

「それじゃ、作戦決めようか。どうしたら良いと思う？いい案、募集」

「いい案、ってあいつらに勝てると思っつのか？聖龍騎士団の師団長が二人だぞ？難しすぎる」

「だってさ、やるからには勝ちたいじゃん。一%でも勝てる可能性があるのなら、それに掛けたい。だってさ、同じぐらいの実力を持った悪魔と戦うかもしれないじゃん？それなら、私は強くありたいと思うから。皆はどう？」

皆、眼を見開いて啞然としていた。あれ？あたし、そんな変な事言っただけ？

「鈴音?????あんた言う時は言うのね。いやあ、凄いわ。私は協力するわ。私の役割って後方支援ぐらいしかないけど」

「うん。今のは驚いたよ。師匠と同じぐらいの実力を持つ悪魔か。考えた事も無かったけど、確かにその通りだね。よし、頑張るとしようかな」

「そうか、確かにそうだな。あいつらとのあまりの戦力差で忘れてたな。そうだな、生きるのを諦めない。これは重要だよな。よし、いっちょ頑張るとするか」

どうやら、協力は得られたようだ。さて、それじゃフォーメーションを決めよう。

Ex・話し合い

どうやら、何とか話はまとまったみたいだな。

「どうやら話はまとまったみたいですね。そうだ。炎真、訊きたい事があるんですけど、いいですか？」

訊きたい事？こいつにしては珍しいな。

拓也は基本的に、自分で調べられる事は自分で調べる、どうしても解らない事は、他人に質問するって言う行動力に溢れた奴だ。

今の地位で解らない事はそうないはずなのに、一体何の事が分からないんだ？

「何だ？質問次第では答えてやらんでもないが？」

「星川さんとういう関係なんですか？」

ッ！そうきたか、ちょっと予想外だな。

俺が黙っていると拓也は立て続けに喋り続けた。追い詰めなければ俺は話さないと思ったからだろ。まあ、そのつもりだったけど。

カデーナ

クローチエ

「あなたの鎖の（・）十字架は、対象が少なくとも、十メートル圏内にいないと発動しないでしょう？でも、あなたが彼女の近くに居たとは思えない。教えて下さいよ。炎真！」

「そう怒鳴るな。教えてやるよ。あいつ……鈴音はな。先代『闇』の妹なんだ。

なあ、拓也。何で『闇』???????絶無の暗黒龍は出てこないと思っ？」

「え？そりゃ、媒体となる指輪が出てこないからじゃないんですか？」

やっぱこいつもそう思ってたのか。

俺はポケットから、漆黒の指輪を取り出した。『闇』との契約時に使う指輪だ。拓也は眼を見開いて驚いていた。そして、珍しく掴みかかってきた

「なっ！なんであんたがそれを持ってた！」

「落ち着け、拓也。焦っても何もならんぞ」

「これが、落ち着いていられるか！あんた、一体どういっつもりなんだ！？」

俺は拓也の胸倉を掴み返して黙らせた。

「落ち着けて言ってるんだろ。落ち着いて指輪を確認してみろ」

拓也の胸倉から手を放し指輪を渡した。今度は指輪を見たとき以上に、驚いていた。

「龍の力が?????宿ってない？炎真、これはどういっことなんです？」

「気づけて、『^{セイルス}継承』だよ。先代の闇の龍王は死ぬ寸前にな、龍帝の力を実の妹である鈴音に『継承』させた。だから、その指輪には龍の力が宿っていないんだ」

『継承』 それは聖龍騎士団の団長が、死ぬ間際にその龍の力を周りにいる者に継承させることから付いた名前だ。だが、継承できる可能性を持つ者は少ない。

「でも『継承』の条件に、上手く合致するかは分からないでしょう？だって、『継承』した者を認めるかどうかは、結局、龍王のさじ

加減一つなんですから」

そう、やはり最終的な決定権は龍王にあるのだ。しかも『継承』で認めて貰うのは、儀式を行って認めて貰うよりも、十倍以上難しい。だから鈴音が『継承』できたのは、はつきり言って奇跡に近い事なんだ。

「それに、それなら彼女は龍の力に目覚めてないと、おかしいじゃないですか。」

それに、彼女は『継承』の記憶がないんでしょう？それもおかしいし、あゝもう、よく解なくなってきた！それで、結局どういう事なんですか？」

はあ、どうしてこいつはそこまで解ってるのに、結論に行きつかないのかな。しょうがないので結論を話した。

「簡単な事だ。あいつの記憶に俺が封印の楔を打ち込んだからだよ。力の継承はその継承した者の記憶を媒介にするからだ。だから記憶を封印されている今、あいつは力を使う事は出来ないのさ。これで質問は終わりか？」

「待ってください炎真。今のもう一つできた。何で記憶を封じたんです？」

こいつの理解のしなさに殺意が湧いてきた。

「???????お前、それは本気で訊いてんのか？」

その声は自分が思っていた以上に低く、鋭かった。だけど構うものか。そう思ってしまうぐらい、俺は怒っていた。気付くと、拓也の胸倉を掴んでいた。

「なあ、拓也。あいつが継承した時、あいつが何歳だったと思ってんだ？まだ、十歳だったんだぞ！小学生もいいところじゃねえか。俺はそのころにはもう戦い始めてたからな、別に構いやしねえよ。ただどな、あいつはただの一般人で、今まで戦いなんて物からは最も縁が無い存在だったんだ。それでもお前は力を持つてるから戦えって言うのか？」

年端もいかぬ子供に、それでも戦えって言うのか？お前は！しかも、あいつが最初に見た死人が誰だかわかってんのか？自分の姉なんだぞ！そんな奴に向かって、お前は戦えって言うのか！？答えて見せるよ！あいつを一番近くで見てきた俺に向かって、そんなセリフを吐けるのになっ！」

しだいに語尾が強くなつていった。そうか。俺にとつても、まだ納得のできてない問題なんだな。これは。見てみると、拓也がへこたれていた。

「悪かったな。お前のせいでもないのに、愚痴つちまつて。まあ、元気出せよ。俺、いや俺達がしなくちゃいけないのは、いつか目覚めるだろうあいつや、他の皆をサポートする事なんだから」

「そうですね。まずは、目の前の事に対処するとしましようか」

「ああ。その息だ。頑張れよ」

「おい、二人とももういいよ。そろそろ始めようよ」

「おっと、むこうも終わったみたいだな。ちょうど良かったじゃねえか」

「あ、そうだ。今思ったんですけど、彼女の楔って解けるんですか？」

「ああ。……先代『闇』からな、そういう風にしておいてって頼まれたんだ。多分、あと一、二年もしない内に解けちゃうと思う。自分の死の悲しみに打ち勝てるぐらいの年齢になるまで、記憶は封印

しておいてって頼まれたからな。さ、目の前の事に集中しろよ。多分、あいつらは一筋縄じゃいかないからな」

「ええ。そうみたいです。眼が違いますからね。さっきとは段違いに」

あの眼は勝てると確信してる。さてはて、どんな策を練ってきたのやら、楽しみだな。

部隊内の模擬戦（1）

こっちの策が練り終えて、二人を呼んだ。これでもかというくらいに策は練った。これで一撃も当たらなければ、もはや絶望的と言っ
ていいぐらいに。

「おう。じゃあ、早速始めようか。そっちの準備はいいか？」

「皆、いけるよね?????うん。大丈夫だよ」

「そうか。じゃあハンデとして、そっちに先攻は譲ろう。こんだけしたんだから、ちゃんと俺らに攻撃を当ててくれよ?」

「そんなの当たり前じゃん。???じゃ、いくよ」

ガウンッ！ガウンッ！

戦いの火ぶたを切ったのは、私のヴァルス・ヘルブスの二丁だ。私がこの銃を使っているのにも、ちゃんとした理由がある。天力を込める事で方向を自由に操れる拳銃なのである。しかも威力も天力を込めた量で変化するし、薬莖やっきょうで属性も変わる。最初に左右から弾丸を飛ばした。

私の勘だと、おそらくこの弾丸は弾かれる。

ギィ
イ
イ
イ
ン
ッ
！

ギィ
イ
イ
イ
イ
ン
ッ
！

やっぱり！私達の策だと、次は？？？？？？棗ちゃんの天術を工
ンチャントした術矢が、二人に降り注ぐ！

[illegible]

よし！これならどうだろう。だが、砂煙が晴れた時に見えた二人は無傷だった。後で訊いてみると、二人は風の術式で全ての矢を受

け流していたらしい。

「ふう、いやはや驚いたね。矢の一本や二本、飛んできた所で大丈夫と思ってたけど、まさか十七本も飛んでくるとは思わなかったね」

こちらとしては、無傷でいられる方が信じられないんだけど！しかも数まで把握してるし！

「ごめんね。でも、ルールに天術を使っちゃダメとはないし。それと、これで終わり？」

それならもう行くけど、良いよね？」

「いい訳ねえだろ」

そう言ったのは、狩野君と玲二君だった。はっきり言うと、私達の攻撃はあの二人を近づかせるための、時間稼ぎにすぎない。だけど、炎藤君と光一君は両方近接タイプ。どっちかって言うとこっちの方が不利。そのために、私達は罠を仕掛けたんだ。

パアアアアアッ！

地面に刺さった矢が発光し始めた。そう。矢にはエンチャントがして有ったんだ。

そしてエンチャントしてたのは、あらゆる物を捕縛する聖光の術式だったんだ。

「ほう、驚きだな。攻撃系だと思っていたら、捕縛系だったんだな。まさか、戦闘中に二度も驚かされるとはな。けどな、この程度の術式でそんなに捕縛できる訳ないだろ！」

ブツッ！一瞬で炎藤君が網を切り裂いた。同時に光一君は剣を

一閃させた。

途端に二人を模っていた水の術式で作られた幻影は消えた。

「光一、右斜め後ろにがいるぞ！坂田よ！気配の殺し方は上手いけどな！その程度の気配の殺し方じゃ、俺達にはばれだぜ！」

炎藤君は左側に、光一君は右側に刀を一閃した。

「まだまだっ！」

ズガガンッ！ズガガンッ！

ベレッタとFIVE SEVENを交互に撃って、二人を援護した。

「はっ、中々のチームワークだけどな！まだまだ甘いぜ！光一、跳べ！」

光一君が跳躍姿勢を取った瞬間に、棗ちゃんは矢を放った。二発連続で。だけど、光一君は矢を弾き、跳躍した。炎藤君は手を上に上げて、風の術を地面に叩きつけようとした。

「させる訳ねえだろ！烈塊双迅流、塊重撃！」

玲二君は、見るからに重い一撃を炎藤君に向かって放った。炎藤君はその一撃を体捌きだけで、かわして見せた。かわされた一撃は地面に当たった。それだけで小規模なクレーターが出来た。

そのせいで体勢が崩された炎藤君は技を放ち損ねたように見えた。だけど、彼は瞬時に術式を作り替えた。その術式は、同じ風の術だった。

「光一！眼を閉じてろ、眩しいぜ！」

「皆、眼を閉じて！二人ともこっちに一回退避して！」

「もう、遅い！」

竜巻のような烈風を天陣越しに感じた。眼を開けると、玲二君の服が裂けていた。この服はどんな術を受けても大丈夫のように特殊な素材でできているのに、何で？

「ぐあ、痛ってえ！うわ、なんじゃこりゃ！」

「種明かしするとな。これはな、ただの風じゃねえ。これは、風と水の術式を組み合わせたかまいたちみたいなものだよ」

「へえ、そうなんだ。それでも、何とか二人だけは守れたよ。危なかった」

天術の障壁を強化して何とか、私と棗ちゃんと狩野君は風から守る事が出来た。光一君が着地してきた。私達の方を向いた途端に驚いていた。

「あれ？なんで、三剣の烈空を受けて無事なの、君達？いくらその距離で障壁を張ってたとしても、今まで三剣の攻撃を防ぎきった人はいないのに」

「決まってるだろ。その分、込めた天力レギムルスが半端じゃないってことだよ。しかし面白いな。まさか俺に合成天術を使わせるとはね。もうすでに合格級の結果を出してるんだけど、でもルールには従わないとな。俺らのどっちかに一撃でも当ててみる。そうすりゃ君達は、上級悪魔クラスに匹敵する実力を持つてる、ってことになる。学生の段階でそれだけできりゃ、君達は最強だよ。さあ、来な！」

「言われなくても、そのつもりだよ。皆、頼みがあるんだ」

「何？そんな前置きしなくたって聞いわよ。あんたの策に私達は従

うだけなんだから。

それで、私達は何をすればいいの？」

「時間を稼いでほしいの。これから発動させる術式は凄い集中しなくちゃいけないから、その間私は何もすることが出来ない。その間私をサポートして」

「了解。それじゃ、玲二君、木場君。私が先制で攻撃するから、その間に二人に近づいてなんとか攻撃して。鈴音、術式を組み合わせる事が出来たら、私の肩を叩いて」

棗ちゃんはこういう土壇場の時に、てきばきと指示を出してくれる。彼女がいてくれてありがたいと思うのは、こういう時だ。

部隊内の模擬戦（２）

「じゃ、始めるよ。準備はいい？」

「もちろん」

ヒュンッ！ヒュンッ！

「速いな。しかも命中力も申し分が無い。これなら本部でも認めて貰えるだろうね。でも、俺らが相手じゃ無駄さ」

そう言っただけで刀で矢を弾いた。その瞬間、矢が強烈な光を放った。光は何も、攻撃や回復しか手段がない訳じゃない。強烈な光は、それだけで目くらましになるんだ。

「おわ、危なっ。びっくりした。まさか目くらまし使ってくるとはな」

「だからどうした？俺たちだってこんな目くらましが効くとは思ってないんだよ」

「どっちにせよ、時間稼ぎが目的なんだろう？それじゃ、やることは変わらないんだよな。術技、十死剣・千手」

刀が千本程ではないにせよ、そう例えられる位に増えていた。

そして一閃させた（・・・）ように見えた。でも、玲二君が言うには、炎藤君は十回も攻撃したらしい。坂田君は何とか見切って槍で防いだり、かわしたりして何とか耐えきった。

「ほう。一発も当たらないとは凄いな。さて、それじゃ次はどうしようかな」

「まだ、あんのかよ！こっちも行くぜ。奥義、四迅六道巡り！」

玲二君は四人位に分身して、それぞれが六回攻撃していた。つまり、合計で二十四回攻撃した事になる。でも炎藤君は、その攻撃を、しかも全部体捌きだけでかわしてしまった。

「どんだけ体柔らかいのよ??????」

光一君と狩野君の戦いは、もう凄まじいの一言に限る。

確かに、炎藤君と玲二君の戦いも凄いんだけど、あつちは何と言うか剛VS柔って感じだったんだけど、こっちは完全に柔VS柔。剣戟の全てを体捌きでかわしていた。

「うわ、危なッ。やっぱ光龍王様とは実力が違い過ぎますね。速すぎる」

「そうかな？そんな事はないと思うけど。君の剣戟もひやつとするような時があるし。」

ただ経験と、修練の長さの違いだと思うんだけど」

「実戦じゃそんなのいい訳にしかありません。修練が少なかったせいで死んじゃった、とか言ってもしょうがないですね。『いつ死んでしまうか分からないから、人は頑張る事が出来るんだ』さっき、作戦立てる前に隊長が言ったセリフです」

「へえ、星川さんも良い事言うじゃん。まだ実戦経験が乏しい人の言葉だとは、とうてい思えないね。ま、炎藤は賛同しそうなセリフだけだね」

「そうですね。こっちもお喋りだけしてる訳にはいきませんから。行きますよ、光龍皇様」「来なよ、世界最強の騎士の弟子よ」

次の瞬間には、二人とも剣と刀をぶつけあっていた。

「ふう、なんとかできた。棗ちゃん、お願い！」

「わかった！二人とも、下がって！」

ヒュンツ！ヒュンツ！

炎藤君と光一君に牽制の矢を放った。二人とも、体捌きだけでその矢をかわした。その間に、玲二君と狩野君はこちら側に走ってきた。

「其は全てを飲み込む闇

あらゆる物を飲み込む力のもと

我にその力の一片を与えたまえ

『始まり（ペイル）の（・）闇』^{ゼロ}」

よし！なんとか成功！三段文言、これ思った以上に難しかった。皆、驚いた顔をしながらこつちを見ていた。

「鈴音、あんた???????三段文言の天術が使えたの？」

「はあ、はあ????。ううん、今までは使えなかったよ。ただ、昔そういう類の本を図書室で見かけたのを思い出しから、昨日借りに行ったの。朝、棗ちゃんと別れた後にね」

「まさか用事ってそれだったの？しかし、あんた天才なのか努力家なのか解らないけど、凄すぎるわよ。っていうか、もう凄いを通り越して恐ろしいぐらいね」

二人の方を見ると、頭上から全てを喰らい尽くす闇属性の光が降り注いでいた。

「光一、ちょっと力を貸せ！これは、ちょっとキツイ。なんてパワーだよ、これ！」

「解りました。じゃあ、いきますよ」

炎藤君は自分の頭上に障壁を張ってガードしていた。光一君は炎藤君の肩を持って彼に天力を送っていた。そして、数十秒後、闇の光は消えた。

そのあと、二人は地面に倒れこんだ。そこで炎藤君が降参、と言ってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1746z/>

虹の祓魔師

2011年12月31日22時47分発行